

黄金時代がもたらした変化とは

取材・文：戸部亮
Foto: Akira Taky

東京交響楽団 音楽監督ジョナサン・ノットとの最後の定期演奏会

東京交響楽団第3代音楽監督として約12年、楽団を牽引したジョナサン・ノット。数々の名演を生んだ「ノット体制」最後の定期演奏会で彼らは、その就任披露公演と同じく「マラー」「交響曲第9番」を取り上げた。



東響での約12年の任期を終えたジョナサン・ノット(11月22日) ©平館平/TSO

ミュゼザ川崎シンフォニーホールでの「名曲全集」終演後、ノットへの感謝を込めたセレモニーが行われた(11月23日) ©平館平/ミュゼザ川崎シンフォニーホール

■公演データ

東京交響楽団
①第736回定期演奏会
②ミュゼザ川崎シンフォニーホール & 東京交響楽団 名曲全集第212回
(日程・会場) ①2025年11月22日・サントリーホール ②11月23日・ミュゼザ川崎シンフォニーホール
(出演) ジョナサン・ノット(指揮)、宮田まゆみ(笙)
(曲目) 武満徹(セレモニアル)、マラー「交響曲第9番」

ノット&東響がうながした「聴き手」側の大きな変容

ジョナサン・ノットと東京交響楽団との12シーズンは疑いなく東響の黄金時代だ。では彼らが達成したことはなんだったか。ノットの巧みな曲目構成で東響は古典から現代まで幅広いレパートリーを獲得した。それ以上に指摘したいのは音作りへの変化だ。それは2011年初共演でのラヴェル《タフニスとクロエ》、就任披露公演となった2014年4月のマラー「交響曲第9番」ですでに発現していた。様式に合わせた柔軟さ、さらには本番でも頻繁に指小を出して高められる楽員の集中力と自発性。縦の線を正確に合わせるが単旋律的になりがちな日本のオーケストラ・スタイル、その変革の予感だった。

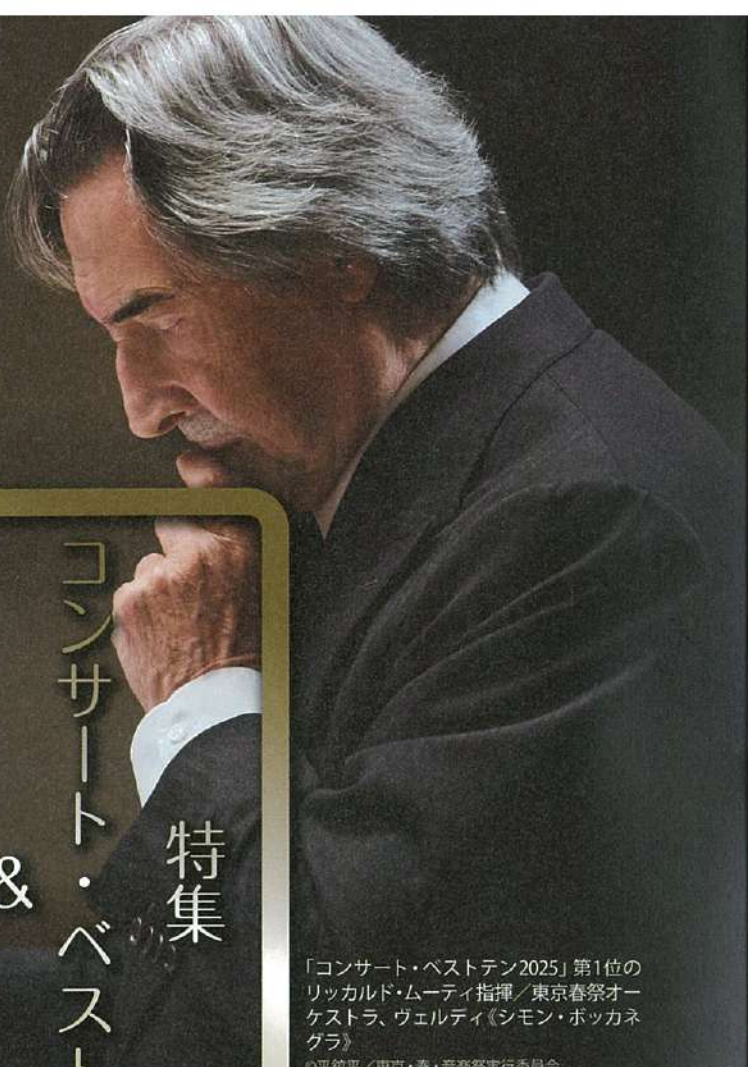
東響は変わった。席次関係なく同じ水準、音量を求め、構成される声部が同格で扱われる。積層させた音は過度に凝縮圧着させず、ダイナミック・レンジと表現スケールの大きさを獲得。ただ、多忙な活動と楽員の入れ替わりもあってか、ノット任期中期のほうが「完成度」は高かった。

必然的にマンネリズムとの戦いになる後期は、演奏の一回性を追求。リスクテイクの名のもと、準備の時間的制約を逆手に、本番での集中力と閃きに重きをおき、熱量

を投入していった。うまく噛み合えばR・シユトラウス《サロメ》《エレクトラ》のような好演につながった。いっぽう「ノット&東響ならばこれくらいは期待できる」という完成度とのトレードオフとなり、「外れ」公演も少なくなかった。

今回のマラーも彼らの後期スタイル。上振れ・下振れリスクの両面が出た。22日は双方がかみ合わない。音に力感がなく、焦点が終始ぼやけた。完成度自体は翌日公演のほうが秀でる。第1楽章はともに停滞気味だったが、第2楽章と第3楽章はリスクを恐れずに舞台上での挑発、応答を繰り返してテンポをどんどん捲り上げていき、狂乱の舞曲とした。これは新鮮な体験。終楽章も感傷に浸らず前進していくことで、作品から生への執着の面を示していく。

振り返るに、彼らの音作りと再現性、さらに完成度の高さが備わった演奏は未完のプロジェクトだった。だが、ライヴの醍醐味を聴かせる演奏スタイルは我々に行動変容を起こした。ステージ上のエネルギー密度が高い演奏は客席の興奮と結びつき、外来オーケストラ公演よりも選好された。その証左は演奏会後、常態化したスタンディング・オヴエーションだ。実は彼らの最大の成果は我々聴き手の行動を大きく変えたことだった。

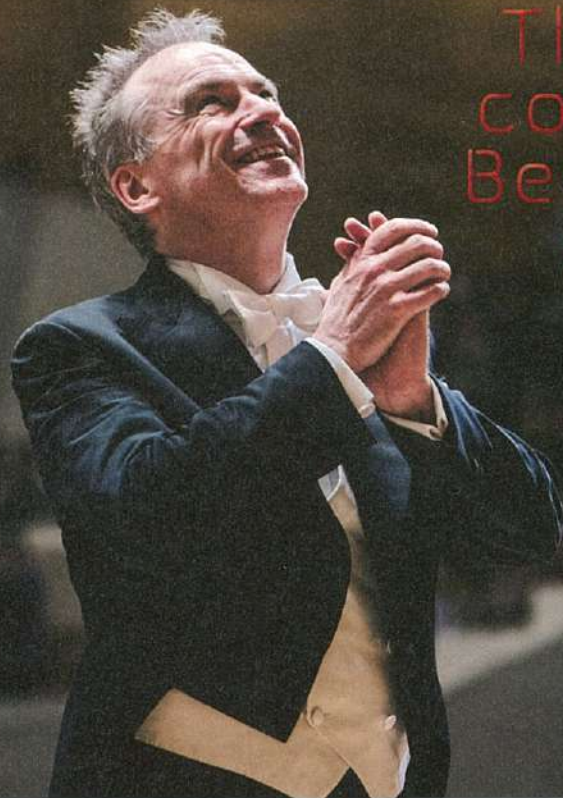


特集
コンサート・ベストテン
&
ベスト・アーティスト
2025

「コンサート・ベストテン2025」第1位のリッカルド・ムーティ指揮/東京春祭オーケストラ、ヴェルディ《シモン・ボッカネグラ》
©平館平/東京・春・音楽祭実行委員会

The top 10 concerts & Best Artist in 2025

1年間のなかで、とくに優れた公演のランキング「コンサート・ベストテン」と音楽評論家を選ぶ「ベスト・アーティスト」期待の新人」を発表。今回は、2024年12月〜2025年11月を対象期間として投票を行いました。受賞者の喜びの声や座談会とともに2025年のクラシック音楽界を振り返ります。



「ベスト・アーティスト」第1位のジョナサン・ノット(指揮)
©平館平/TSO

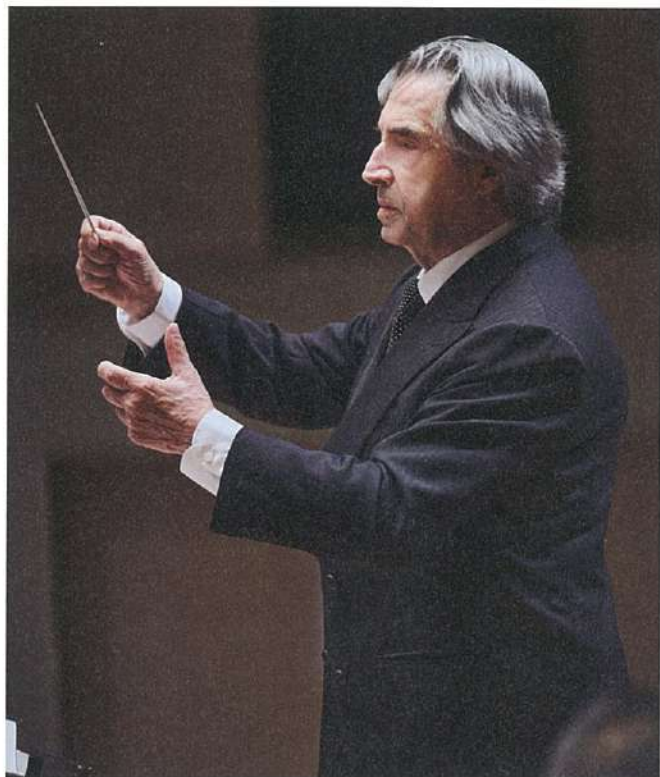
コンサート
ベストテン
第1位

リッカルド・ムーティ指揮／東京春祭オーケストラ ヴェルディ《シモン・ボッカネグラ》(演奏会形式)

昨年引き続き2連覇 マエストロが魅せた——雄弁でコクのある響き

出演者コメント

2024年のヴェルディ《アッティラ》に続き、今年もヴェルディ《シモン・ボッカネグラ》が2025年のコンサートのなかで高い評価を得たという知らせを、とてもうれしく受け取りました。日本は音楽水準が非常に高い国と認識しているため、喜びもひとしおです。私と力を合わせて、より素晴らしい演奏を目指して励んでくれた東京春祭オーケストラ、ソリスト、合唱のみなさんと喜びを分かち合いたいと思います。とくに、日本の優秀な音楽家の方々とともに演奏することは私にとって大きな楽しみになっています。そして、私が愛してやまない日本の観客のみなさんにも心からのごあいさつをおくりたいと思います。舞台上の演奏者と音楽に没頭し、熱心に耳を傾ける観客の方々が一つになつたとき、最高の演奏が生まれるのです。私は世界各地で、折に触れ日本の観客のみなさんのすばらしさを語ってきました。



ヴェルディの真髄を伝えた帝王リッカルド・ムーティ
©平鐘平／東京・春・音楽祭実行委員会

（指揮）
リッカルド・ムーティ

2026年も4月にモーツァルト《ドン・ジョヴァンニ》で来日することを楽しみにしています。

また、日本の聴衆のみなさまの深い集中力と感情の開かれた受け止めかたが、公演の場に忘れがたい雰囲気を生み出してくださいました。音楽は、聴かれることによって生きるものです。ホールで感じた反応そのものが、この成功に欠かせない要素でした。心から感謝を申し上げます。
イヴォナ・ソボトカ
（アメリリア役/S）



表情豊かな美声を聴かせたアメリリア役のイヴォナ・ソボトカ
©増田健介／東京・春・音楽祭実行委員会

このたび、「イタリア・オペラ・アカデミー in 東京 vol.5」のヴェルディ《シモン・ボッカネグラ》が、「コンサート・ベストテン2025」第1位に選出されたことを大変光栄に思います。深い音楽文化と鋭い審美眼をもつ日本という国でこのような評価をいただいたことは、私にとって本当に大きな意味を持ちます。

この公演は、見事な共同作業の結晶でした。《シモン・ボッカネグラ》は、心理的な深みと感情の複雑さを併せ持つ作品であり、その内面的な緊張感、詩情、そして人間性を舞台上に生き生きと立ち上らせるためには、マエストロのムーティをはじめ、オーケストラ、合唱、ソリスト、そして制作チーム全体の完全な信頼と協働が不可欠です。情熱と規律、そして共通の芸術的ビジョンをもって楽譜に向き合った、すばらしいアーティストのみなさんと一緒にできたことをとても幸運に思います。



The First Prize
Riccardo Muti & Tokyo HARUSAI Orchestra
Verdi "Simon Boccanegra"

輝かしく力強い声と表情豊かな歌唱がヴェルディ作品の美しさを描き出した
©池上直成／東京・春・音楽祭実行委員会

ここが すごい！

ヴェルディ《シモン・ボッカネグラ》は、ドラマの要素が強く、一聴して魅せられるメロディや単独で取り上げられる音楽に乏しいオペラだ。ところが、今回のリッカルド・ムーティ指揮の演奏は、シリアスな迫真性のみならず、イタリア・オペラあるいはヴェルディ・オペラならではのカンタービレや沸き立つような情感を併せ持っていた。「この作品もヴェルディ音楽独特の『チャーム』を有している」。そう思わせるような表現は、ほかではまず不可能であろう。

とくに感心させられたのは、雄弁でコクのあるオーケストラの響き。それは、長きにわたるアカデミーの積み重ねで（たとえその言葉が若い指揮者や歌手に向けた指摘であっても）植え付けられた種々のポイントムーティの精髓を反映したものであり、プロといえども時間をかけたリハーサルが大きな成果を生み出すことの証明でもある。加えてソロ歌手たちの輝かしく力強い声と表情豊かな歌唱もまた、前記の魅力につながったといえるだろう。
（柴田克彦）

■公演データ
イタリア・オペラ・アカデミー in 東京 vol.5
リッカルド・ムーティ指揮ヴェルディ《シモン・ボッカネグラ》(演奏会形式)
〈日程・会場〉2025年9月13、15日・東京音楽大学100周年記念ホール
〈出演〉リッカルド・ムーティ(指揮)、東京春祭オーケストラ、東京オペラシンガーズ/ジョルジュ・ベテアン(シモン・ボッカネグラ)、イヴォナ・ソボトカ(アメリリア)、ミケーレ・ベルトウージ(ヤコポ・フィエスコ)、ピエロ・プレッティ(ガブリエーレ・アドルノ)、北川辰彦(パオロ・アルビアニ)、他



30年ぶりに来日した古典界の巨匠ルネ・ヤーコプス
©大塚道治(写真提供:東京オペラシティ文化財団)

伊藤制子 Seiko Ito

■音楽学・音楽評論
演奏回数: 91回

**期待の来日公演で印象に残った
ヤーコプスの卓抜とした指揮ぶり**
カウター・テナーとして一時代を築いたルネ・ヤーコプスが日本で指揮台に立ったのは久しぶり。歌手の水準がよくそろったヘンデルのオラトリオ《時と悟りの勝利》を堪能でき、ヤーコプスの卓抜とした指揮ぶりが印象的だった。松村衣里のベックメツサー・ハープ公演は、この珍しい楽器の魅力を多角的に表現した好企画だと評価できる。大石将紀(sax)、北村朋幹(p)らの優れた演奏も特筆に値する。Just Composed 2025 in Yokohama「現代作曲家シリーズ」は演奏水準の高いおもしろい企画だった。ナタリー・ドセイ(S)は本場に引退するのかもしれないくらい充実した歌いぶり。フランス歌曲の美しいディクションは彼女ならではの。イザベル・ファウスト(VN)のモーツァルトのヴァイオリン協奏曲特集はジョヴァンニ・アントニーニの巧みな指揮もあいまって、非常に聴き応えのある一夜だった。アンドレアス・シュタイア(hp)に依頼したカデンツァも興味深いものだった。若手の水野斗希はコントラバス奏者の枠を超えて、今後音楽界を牽引していく人材になろう。ハノーファー州立劇場第2カベルマイスターを務める熊倉優には、ぜひ日本でオペラの指揮を披露していただきたい。ディエウアとしての華を備えた小川葉奈(S)。得意のベルカント・オペラで大輪の花を咲かせるのは間違えらる。

第1位◎ルネ・ヤーコプス指揮/ビー・ロック・オーケストラ、ヘンデル《時と悟りの勝利》

- ジョヴァンニ・アントニーニ指揮/イル・ジャルディーノ・アルモニコ、イザベル・ファウスト(vn) [2024年12月11日/東京オペラシティ コンサートホール]
- 大石将紀(sax) [1月30日/ゲート・インスティテュート東京]
- 福川伸陽(hrn)、小林沙羅(S)、中恵葉(va)、藤川悠樹(p)、「Just Composed 2025 in Yokohama-現代作曲家シリーズ」 [3月8日/横浜みなとみらいホール(小)]
- 箕面市立メイプルホール、ファリヤ《ペドロ親方の人形芝居》 [4月26日/箕面メイプルホール]
- 松村衣里(hp) [5月25日/丸一商店株式会社ギャラリー]
- 北村朋幹プロデュース、シェーンベルク《月に憑かれたピエロ》 [6月16日/サントリーホール(小)]
- ジョナサン・ノット指揮/スイス・ロマン管、上野通明(vc)、プログラムA [7月8日/ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団]
- グスターボ・ドゥダメル指揮/ロサンゼルス・フィル、ストラヴィンスキー、他 [10月24日/サントリーホール]
- ナタリー・ドセイ(S) & フィリップ・カザール(p) [11月2日/神奈川県立音楽堂]
- ◎ベスト・アーティスト
ルネ・ヤーコプス(指揮)、ナタリー・ドセイ(S)、イザベル・ファウスト(vn)
- ◎期待の新人
水野斗希(cb)、熊倉優(指揮)、小川葉奈(S)

池田卓夫 Takuo Ikeda

■音楽ジャーナリスト
演奏回数: 264回

**芸術面でさらなる進化を見せた
ベルリン・フィル**
ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団が数カ月の間に2度も来日したのは初めてだが、現在の首席指揮者&芸術監督キリル・ペトレンコとの組み合わせとしては、2年ぶり2度目となった11月のアジア・ツアーでは、オーケストラの機能面でもさらなる進化を見せた。とくにヤナーチェク、バルトーク、ストラヴィンスキーを並べたロシア・東欧プログラムは、ホルンのユン・ゼンラートレック時代になつて入団した新しい音楽家首席奏者が顔をそろえ、猛烈な名人芸を發揮したにあらたに。キラ星のような外来ラッシュのなか、広島県福山市の「ふくくやま日本歌曲塾」が、全国どこに出しても恥ずかしくない水準の20周年記念コンサートで気を吐くなど、地方都市の音楽水準の向上も交響楽団だけにとどまらない。マルタ・アルゲリッチ(p)やリッカルド・ムーティ(指揮)、アンドラーシュ・シッフ(p)が、世界基準と地域色を兼ね備えた演奏活動を日本でも続けているのも、比較的新しい現象だ。長く女性上位だった日本の若手アーティストでは現存の巻返しが目立ち、とりわけの阪田知樹と北村朋幹は作曲や指揮などを通じて、ピアノの枠にとどまらない総合的音楽家の領域にどんどん足を踏み入れているのが頼もしい。フサンソン・コンクール優勝の指揮者、米田寛士の活躍は来年以降に期待できそうだ。

第1位◎キリル・ペトレンコ指揮/ベルリン・フィル、プログラムA

- 山田和樹指揮/日本センチュリー管、東京混声合唱団、「メンデルスゾーン-光のほうにvol.3」 [1月26日/住友生命いずみホール]
- アンドラーシュ・シッフ指揮、p/カペラ・アンドレア・バルカ、プログラムA [3月21日/ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団]
- ジョン・ミョンファン指揮/宮崎国際音楽祭管、三浦文彰(vn) [5月17日/メディキット県民文化センターアイザックスターンホール]
- ジョナサン・ノット指揮/東響、プリテン《戦争レクイエム》 [7月21日/サントリーホール]
- セイジ・オザワ 松本フェスティバル、プリテン《夏の夜の夢》 [8月17日/まつもと市民芸術館]
- リッカルド・ムーティ指揮/東京春祭オーケストラ、ヴェルディ《シモン・ボッカネグラ》(演奏会形式) [9月13日/東京音楽大学100周年記念ホール]
- ふくくやま日本歌曲塾、「生誕140年 詩人北原白秋をうたう」 [9月28日/ふくくやま芸術文化ホール リーデンローズ]
- クリスティアン・アルミンク指揮/広響、「平和音楽大使 マルタ・アルゲリッチ 特別公演」 [10月16日/広島文化学園HBGホール]
- クラウス・マケラ指揮/ロイヤル・コンサートヘボウ管、アレクサンドル・カントロフ(p)、プログラムA [11月17日/サントリーホール]
- ◎ベスト・アーティスト
マルタ・アルゲリッチ(p)、リッカルド・ムーティ(指揮)、ジョナサン・ノット(指揮) & 東京交響楽団
- ◎期待の新人
北村朋幹(p)、阪田知樹(p)、米田寛士(指揮)



世界最高峰の楽団の一つベルリン・フィルハーモニー管弦楽団。
2025年は7月と11月に来日し、超一流の音色を届けた
©Monika Rittershaus

青澤隆明 Takaakira Aosawa

■音楽評論家
演奏回数: 257公演

**多様な愛と歌を紡いだ
ノット×東響のラスト・シーズン**
ひたすら目を凝らす。時が流れてくる。音楽が響く。ハゲン・クアルテットは機能的な合奏を迫らず、自在な対話の類もしい境を拓いた。イェフイム・ブロンフマン(p)、アンドラーシュ・シッフ(p)、ピルネカス・スカーマン(vn)、シユロモ・ミンツ(vn)、マリオ・ブルネロ(vn)、ヘルベルト・ブロンシュテット(指揮)とレイフ・オヴェ・アンズネス(p)、ビヨートル・アントン(指揮)とロサンゼルス・フィルハーモニー管弦楽団を迎えた。パトリシア・コバチンスカヤ(vn)、ジャン・ルイ・カサス(vn)、三浦文彰(vn)、清水和音(p)、ミハイル・プレトニョフ(p)、指揮、アレクサンドル・メルニョフ(p)、ユリアナ・アウディエワ(p)、フランチェスコ・トリスターノ(p)、藤田真央(p)、イゴール・レグニツ(指揮)、アレクサンドル・カントロフ(p)が、真率な進境を踏まえた。リッカルド・ムーティ(指揮)と若い世代との冒険は熱き旅のなか。クラウス・マケラ(指揮)の挑戦はまた始まる光のうちに。ジョナサン・ノット(指揮)が東京交響楽団とのラスト・シーズンを、さまざまなお歌で満たしていった。スイス・ロマン管弦楽団との熱き旅に続き、プリテン《戦争レクイエム》、J.S.バッハ《マタイ受難曲》、ラヴェル《子供と魔術》で、多様な愛と憧れを大きく歌い続けた。そしてマリア・アウグスタ・カントロフ(p)、孤独な精神の絶頂を描き進めるように生き書き、12年を超える果敢な旅を綴った。北村朋幹はピアノだけでなく、指揮、編曲、プロデュースでも意気と知力を揮った。沖澤のどか(指揮)は、隠岐夏美(S)とともに故郷青森に手づくりの音楽祭も立ち上げた。人それぞれに、時の只中を勇敢に生きていくのだ。

第1位◎ジョナサン・ノット指揮/東響、ガリナ・チェブラコワ(S)、ロバート・ルイス(T)、マティアス・ウィンクラー(Br)、東響コーラス、プリテン《戦争レクイエム》

- 北村朋幹(p)、20世紀のピアノ作品〜1950年代以降のヨーロッパ [2月15日/滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール(小)]
- 清水和音(p)、三浦文彰(vn) ベートーヴェン・ソナタ・ツィクルスIII [2月23日/サントリーホール]
- クラウス・マケラ指揮/バリ管、ラヴェル・プログラム [6月20日/サントリーホール]
- セイジ・オザワ 松本フェスティバル、プリテン《夏の夜の夢》 [8月24日/まつもと市民芸術館]
- イェフイム・ブロンフマン(p) [9月16日/東京オペラシティ コンサートホール]
- ウィーン国立歌劇場、R.シュトラウス《ばらの騎士》 [10月20日/東京文化会館]
- グスターボ・ドゥダメル指揮/ロス・フィル、チェン・レイス(S)、ペス・テイラー(Ms)、新国立劇場合唱団 [10月25日/サントリーホール]
- ハーゲン・クアルテット [11月11、12、13日/ TOPPANホール]
- ジョナサン・ノット指揮/東響、宮田まゆみ(笙) [11月22日/サントリーホール、11月23日/ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団]
- ◎ベスト・アーティスト
ジョナサン・ノット(指揮)、北村朋幹(p)、沖澤のどか(指揮)
- ◎期待の新人
本堂竣哉(p)、久末航(p)、鈴木愛美(p)

第1位◎イェフイム・ブロンフマン(p)

- 榎本大進(vn)、ラファウ・ブレハッチ(p) [2024年12月19日/サントリーホール]
- クリスティアン・ゲルハール(Br)、ゲロルト・フーバー(p) [3月19日/東京文化会館(小)]
- ベルチャ 弦楽四重奏団 & エペーン 弦楽四重奏団 [3月29日/神奈川県立音楽堂]
- アサド兄弟(g) [4月25日/日本製鉄紀尾井ホール]
- ヘルベルト・ブロンシュテット指揮/N響、レイフ・オヴェ・アンズネス(p)、第2047日定期公演(プログラム) [10月25日/ NHKホール]
- ダヴィッド・フレイ(p) [11月1日/すみだトリフォニーホール]
- クリスティアン・ティーマン指揮/ウィーン・フィル、J.シュトラウス、他 [11月16日/サントリーホール]
- クラウス・マケラ指揮/ロイヤル・コンサートヘボウ管、アレクサンドル・カントロフ(p)、プログラムA [11月17日/サントリーホール]
- キリル・ペトレンコ指揮/ベルリン・フィル、プログラムB [11月23日/サントリーホール]
- ◎ベスト・アーティスト
クラウス・マケラ(指揮)、アレクサンドル・カントロフ(p)、ダヴィッド・フレイ(p)
- ◎期待の新人
NOVOカルテット、ボーダン・ルーツ(vn)、HIMARI(vn)

38人の音楽評論家・記者が選ぶ

コンサート・ベストテン & ベスト・アーティスト2025

●対象演奏会
2024年12月1日から2025年11月30日までの間に
聴いた国内の演奏会
●対象アーティスト
2025年いちばん印象的だったアーティストを「ベスト・アーティスト」と「期待の新人」それぞれ最大3名選出

The top 10 concerts & Best Artist in 2025

伊熊よし子 Yoshiko Ikuma

■音楽ジャーナリスト
演奏回数: 非公開

**聴き手の心をとりこに
ブロンフマン特有のピアノニズム**
2025年はヨーロッパの名門オーケストラが相次いで来日し、絆の深さを誇る指揮者との共演で圧倒的な名演を披露した。なかでもバリ管弦楽団とロイヤル・コンサートヘボウ管弦楽団と来日したクラウス・マケラ(指揮)は、次代を担う生き生きとした指揮で歴史あるオーケストラに新風を吹き込み、聴き手の心を高揚させた。ピアノではイェフイム・ブロンフマン(p)が弱音の美を秘めた神秘的で静謐で情感に富む特有のピアノニズムで、ブラームス《ピアノ・ソナタ第3番》、プロコフィエフ《ピアノ・ソナタ第7番》(戦争ソナタ)において圧倒的な才能を示し、忘れえぬ印象を残した。彼の深々と打響と絶妙のペダル奏法は真のピアノ好きの心をとりこに離さない。キリル・ゲルシュタイン、ダヴィッド・フレイ、ルーカス・ゲニューリヤス、アレクサンドル・カントロフ、レイフ・オヴェ・アンズネス(以上p)、アントニー・ロマンニウク(指揮)、他)をはじめとする実力派ピアニストも、個性的な選曲で自身の「いまの充実」を音に託した。新人は数多く聴いたが、弦楽器奏者に傑出した存在が多く、NOVOカルテットの自由闊達なアンサンブル、ボーダン・ルーツ(vn)の年齢を超えた成熟した演奏、HIMARI(vn)の類まれなる集中力に感銘を受け、明るい未来を感じた。

第1位◎カーチュン・ウォン指揮/日本フィル、第773回定期演奏会 [9月13日/サントリーホール]

- 神戸文化ホールオペラ、ヴェルディ《ファルスタッフ》 [2024年12月21日/神戸文化ホール]
●ベルチャ弦楽四重奏団&エペヌ弦楽四重奏団 [3月28日/ TOPPANホール]
●藝トリオ [6月13日/サントリーホール(小)]
●北村朋幹プロデューズ、シェーンベルク《月に憑かれたピエロ》 [6月16日/サントリーホール(小)]
●ジョナサン・ノット指揮/東響、ブリテン《戦争レクイエム》 [7月21日/サントリーホール]
●セイジ・オザワ 松本フェスティバル、ブリテン《夏の夜の夢》 [8月24日/まつもと市民芸術館]
●ウィーン国立歌劇場、R.シュトラウス《ばらの騎士》 [10月24日/東京文化会館]
●シャルル・デュトワ指揮/N響、第2049回定期公演Cプログラム [11月14日/NHKホール]
●クラウス・マケラ指揮/ロイヤル・コンセルトヘボウ管、プログラムB [11月16日/ミュンヘン・ザリッヒンフォニーホール]

◎ベスト・アーティスト 藤田真央 (p)、レオニダス・カヴァコス (vn)、カーチュン・ウォン (指揮)
◎期待の新人 ソフィア・リュウ (p)、中川優芽花 (p)、佐々木つくし (vn)

加藤浩子 Hiroko Kato

音楽評論家 演奏会数：非公開

ヴェルディのオーケストレーションの凄さを見せつける
ここ数年、リッカルド・ムーティ(指揮)のヴェルディ・オペラばかり第1位に挙げているので、(シモン・ボッカネグラ)を推すのは気が引けるのだが、今回は「ワグネル」とは違つた「ヴェルディ」のオーケストレーションの凄さを見せつけた点で特筆に値する。ムーティのヴェルディ愛のたまものである。クラウス・マケラ(指揮)はロイヤル・コンセルトヘボウ管弦楽団の信頼を得て、彼らの力を引き出すことに成功している。この若さでこの才能は驚異的だ。アレクサンドル・カントロフ(p)との相性もよかつた。アントネッロはモンテヴェルディ(オペラ)中心の作品を集めた「S.パッハのカンタータのコンサートをあげたい。巨匠ルネ・ヤコブスとピー・ロック・オーケストラのヘンデル《時と悟りの勝利》では、ヘンデルの原型がみずみずしく浮かび上がり、古楽界に於ける「ヴェルディ」は若い世代の理想的な関係を見た。マックス・サントリオンは劇場と作品が一体化した世界ヴェルディの公演「夏の夜の夢」は、音楽と演劇が溶け合った世界ヴェルディの公演「モーツァルト・ドナ・ジョヴァンニ」は、礼賛のオペラを作る意欲を評価したい。東京・春・音楽祭の演奏会形式オペラはどれもヴェルディが高いが、芸達者そろそろ有た「シモン・ボッカネグラ」に1票を投じた。声楽の有望な新人に出会えたのもうれしい。中江万由子(S)は超絶級の声の持ち主。栗原峻希(Br)は礼賛の「ドン・ジョヴァンニ」、および「シモン・ボッカネグラ」の若い音楽家のための公演でタイトルロール。スタイリッシュな歌唱に将来性を感じた。

第1位◎リッカルド・ムーティ指揮/東京春祭オーケストラ、ヴェルディ《シモン・ボッカネグラ》(演奏会形式) [9月15日/東京音楽大学TGMホール]

- hitaruオペラプロジェクト、モーツァルト《ドン・ジョヴァンニ》 [3月7日/札幌文化芸術劇場hitaru]
●ルネ・ヤコブス指揮/ピー・ロック・オーケストラ、ヘンデル《時と悟りの勝利》 [4月4日/東京オペラシティ コンサートホール]
●ジョナサン・ノット指揮/東響、R.シュトラウス2世《こうもり》 [4月18日/東京文化会館]
●濱田芳通指揮/アントネッロ、第19回定期演奏会 [7月11日/東京文化会館(小)]
●セイジ・オザワ 松本フェスティバル、ブリテン《夏の夜の夢》 [8月17日/まつもと市民芸術館]
●スウェーデン放送合唱団 [10月21日/東京オペラシティ コンサートホール]
●NISSAY OPERA、マズネ《サントリオン》 [11月16日/日生劇場]
●クラウス・マケラ指揮/ロイヤル・コンセルトヘボウ管、アレクサンドル・カントロフ(p)、プログラムA [11月17日/サントリーホール]
●新国立劇場、ベルク《ヴォツェック》 [11月24日/新国立劇場 オペラバレス]

奥田佳道 Yoshimichi Okuda

音楽評論家 演奏会数：132回

カーチュン・ウォン日本フィルが創る「マーラー」交響曲の壮大な世界
もう何年も前から創造的な仕事をしているカーチュン・ウォン(指揮)だが、若手中堅の音楽家者を軸に演奏水準をおおいに高めている日本フィルハーモニー交響楽団との「マーラー」交響曲第6番(悲劇的)で、あらためて魅せた。ご多分に濡れぬ多数のエキストラ奏者を迎えての拡大編成で、壮絶な音響も舞ったが、大味に陥ることなく内外に攻める。これぞライブの喜び。音楽陣の一部に驚かすほどの出来栄があったものの、やはり主眼をなせるドラマを構築した「マーラー」交響曲第2番(復活)は、3月、技も視座も明確な同「交響曲第5番」(5月)、それにシヨスタコヴィチ「交響曲第11番」(1995年)(10月)との合わせ技でこのコンクールを推す。なお選者は日本フィルの動画サイトに出演しているが、曲の紹介が主で個別の公演にはかかわっていない。カーチュンは大抵日本フィル「マーラー」交響楽団とのエルガー《エニグマ変奏曲》ドヴォルジャーク《交響曲第9番(新世界より)》(11月大阪真面)でも、作品から風景や物語を紡ぐ。そしてメンバーの技を嫌味なく高みに導く。聴き続けたい指揮者だ。レオニダス・カヴァコス(vn)はフタバ・ジョージ指揮NHK交響楽団定期公演で18番のシヨスタコヴィチ指揮Nチに腕をふるい、世界最高峰を披露した。ソフィア・リュウ(p)の音楽的な立ち居振る舞い、中川優芽花(p)の音色の美しさ、日本製鉄尾井ホールで聴いた佐々木つくし(vn)の覇気と可能性に拍手を。

小畑恒夫 Tsuneo Obata

音楽評論家 演奏会数：非公開

理想世界の音楽を実現 オペラを楽しむ至福の時を提供
ベストテンには、あまりないことだが、桁違いの満足感を与えてくれた公演が3点ふくまれる。一つは第1位にしたウィーン国立歌劇場のR.シュトラウス《ばらの騎士》。あとはマレク・ヤノフスキ(指揮)のベートーヴェン《ミサ》、ソレムニスとリッカルド・ムーティ(指揮)のヴェルディ《シモン・ボッカネグラ》(演奏会形式)である。《ばらの騎士》は演奏がすばらしいと、演出がすごいと、この主張が斬新だが、近年オペラ公演に至るまで「新しさの発見」ではなく、オペラを楽しむ至福の時を提供してくれた。傷がないわけではないが、そこは長い伝統のなかでよきものを蓄積し、熟成させてきた劇場だからこそ可能になる豊かな喜びがあった。ヤノフスキとムーティは、ともに長老指揮者でありながら見事な指導力で演奏者たちをみずから理想世界に引き込み、強烈な演奏を実現させてくれた。これぞ芸術的行為の真髄といべきだろう。ベスト・アーティストは(お引き受けした)に申し訳ないが、選べない。ここでは年齢を忘れて進化を続けるムーティを選んできておく。また歌手に興味のある筆者は期待の新人も選べない。新人って何歳まで? 歌手の成長は様々な要因で左右されるので、そんな不安を吹き飛ばす逸材が現われたらあげることしよう。

第1位◎ウィーン国立歌劇場、R.シュトラウス《ばらの騎士》 [10月22日/東京文化会館]

- 藤沢市民オペラ、モーツァルト《魔笛》 [2024年12月14日/藤沢市民会館]
●マレク・ヤノフスキ指揮/N響、ベートーヴェン《ミサ・ソレムニス》 [4月4日/東京文化会館]
●リッカルド・ムーティ指揮/東京春祭オーケストラ [4月11日/東京文化会館]
●オクサーナ・リーニフ指揮/読書、ブッチェニ《蝶々夫人》(演奏会形式) [4月13日/東京文化会館]
●ミケレ・マリオッティ指揮/東響、川崎定期演奏会第100回 [6月7日/ミュンヘン・ザリッヒンフォニーホール]
●リッカルド・ムーティ指揮/東京春祭オーケストラ、ヴェルディ《シモン・ボッカネグラ》(演奏会形式) [9月13日/東京音楽大学100周年記念ホール]
●ウィーン国立歌劇場、モーツァルト《フィガロの結婚》 [10月9日/東京文化会館]
●ナタリー・デセイ(S) & フィリップ・カサール(p) [11月2日/神奈川県立音楽堂]
●新国立劇場、ベルク《ヴォツェック》 [11月20日/新国立劇場 オペラバレス]



東京交響楽団の音楽監督ジョナサン・ノットのラスト・シーズン。戦後80年の2025年に聴くブリテン《戦争レクイエム》は、心に響くものであった ©Nkegami/TSO

梅津時比古 Tokihiko Umezu

毎日新聞特別編集委員 演奏会数：非公開

デセイの至芸
ソプラノのナタリー・デセイの至芸を堪能した。フィリップ・カサールのピアノと共演(つまりデセイが高音部を担当)でなんとシユベルトの連弾の「幻想曲」から始まる。へ短調の第1主題が終わったところで、デセイは中央に戻り、モーツァルト《フィガロの結婚》からバルバリナーナ(無くしてしまつたわ)へ短調を歌う。モーツァルトとシユベルトが見事につながる不思議な音楽史を教わる思いだった。続いてショーンやラウエルの鳥をテーマにした歌曲で自由と反戦を歌い、後半、バーバーで第一次世界大戦のなんでもない日常を染みこませる。
ベスト・アーティストはベスト10以外から。ジョナサン・ノット(指揮) 東京交響楽団はブリテン《戦争レクイエム》で本来のブリテンの意図をできる限り忠実に再現した。山田和樹(指揮) バミンガム市交響楽団は、シエク・カネーメイソン(vn)をゲストに迎えたエルガー「チェロ協奏曲」やウッド編曲のムンク「展覧会の絵」でひと味違った響きを見事に繰り広げた。ダニエル・オッテンザマー(d)の柔らかな音は、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の基になっていることを充分に納得させる。新人の鈴木愛美(p)は日本音楽コンクールなどの覇者だが、その後どこまで聴いても深く真摯な音楽性に感動する。

第1位◎ナタリー・デセイ(S) & フィリップ・カサール(p) [11月6日/東京オペラシティ コンサートホール]

- クリスティアン・ゲルハーヘル(Br) & ゲロルト・フーバー(p) [3月22日/東京文化会館(小)]
●ルネ・ヤコブス指揮/ピー・ロック・オーケストラ、ヘンデル《時と悟りの勝利》 [4月4日/東京オペラシティ コンサートホール]
●広上津一指揮/水戸室内管、マルタ・アルゲリッチ(p)、第115回定期演奏会 [5月17日/水戸芸術館 コンサートホールATM]
●菊池洋子(p) [8月5日/サントリーホール(小)]
●高岡健指揮/東京シティ・フィル、第381回定期演奏会 [9月6日/東京オペラシティ コンサートホール]
●新タヴィッド同盟 第8回演奏会 [9月18日/水戸芸術館 コンサートホールATM]
●ウィーン国立歌劇場、モーツァルト《フィガロの結婚》 [10月9日/東京文化会館]
●クリスティアン・ティレマン指揮/ウィーン・フィル、ブルクナー「交響曲第5番」 [11月15日/サントリーホール]
●クラウス・マケラ指揮/ロイヤル・コンセルトヘボウ管、プログラムB [11月18日/サントリーホール]

上田弘子 Hiroko Ueda

音楽評論家 演奏会数：203回

リッカルド・ムーティの揺るぎないタクトに感涙と最敬礼
2025年はメジャーな国際ピアノ・コンクールの当り年で、続々と入る日本人の上位入賞のニュースには歓喜。しかし音楽を極める道ははてしなく長い。中堅やヴェテランの演奏を聴きながら、若き入賞者たちの5年後10年後、さていかにの思い。変わらぬ混沌とした世界情勢でますます加速のデジタル社会。自分の在りかたを死守したくても、時に迷う日常のなか、マエストロ・ムーティの揺るぎないタクトに感涙と最敬礼。「楽譜はバイブル」といわれるように、一つひとつの音符の重みを実感し、それゆえ読み込まれた楽譜の向こうの世界の美しさ。ピアノの清水和音や若林頭にはムーティと同じものを感じ、「この人たちがいてくれる」という安心感。次世代の阪田知樹は作曲家でもあり、ピアノと脳と作曲家脳からの卓越した技量には大いに期待している。さらに若い奥井紫麻(p)の「正しき奏法」をうれしく聴き、しかも1年のなかで聴きたびに進化している類も。ヴァイオリンの毛利文香も魅力的で、やはり読者の深さゆえの表現力。いまや紙ではなくタブレットで読める楽譜だが、筆者はやはり紙で読みたい。版によって異なる音符の姿と紙の匂い。そこに音楽の歴史と魅力があることも、名手から再認識。

第1位◎リッカルド・ムーティ指揮/東京春祭オーケストラ [4月11日/東京文化会館]

- エフゲニー・キーシン(p) [2024年12月2日/サントリーホール]
●レ・ヴァン・フランセ [3月17日/東京オペラシティ コンサートホール]
●清水和音(p)、三大ピアノ協奏曲の響宴2025 [4月30日/サントリーホール]
●毛利文香(vn)、ミハエラ・マルティン(vn) [6月10日/Hakuju Hall]
●アレクサンドル・メルニコフ(p) [6月28日/ TOPPANホール]
●ジョナサン・ノット指揮/スイス・ロマン管、上野通明(vc)、プログラムA [7月8日/ミュンヘン・ザリッヒンフォニーホール]
●園田高弘 Memorial Series ファイナルコンサート [10月11日/ TOPPANホール]
●キリル・ベレンコ指揮/ベルリン・フィル、プログラムA [11月20日/横浜みなとみらいホール]
●若林頭(p)、3大ピアノ協奏曲の響宴 [11月30日/東京オペラシティ コンサートホール]



注目の若手ピアニスト奥井紫麻 ©Evgenii Evstikhov

- ◎ベスト・アーティスト ジョナサン・ノット(指揮)、山田和樹(指揮)、ダニエル・オッテンザマー(c)
◎期待の新人 鈴木愛美(p)

柴田克彦 Katsuhiko Shibata

■音楽評論家
演奏会数：317回

今年のベストテンは「断然の第1位が思い付かず」かなり迷ったが、最終的に「イタリア・オペラ・アカデミー」のリッカルド・ムーティ(指揮)ヴェルディ《シモン・ボッカネグラ》を選んだ。これは、巨匠ムーティのみが演出可能なイタリア・オペラ、およびヴェルディの真髓を堪能した公演。とくにオーケストラの豊かな音色と各場面に即した表現は、アカデミーにおける積み重ねの成果を如実に表していたし、粒ぞろいの歌手陣の好唱も光っていた。「ベスト・アーティスト」は指揮者に絞って選出。なかでもジョナサン・ノットの活躍は出色だった。うまく絞られなかったためベストテンには入れなかったが、ラストを飾る東京交響楽団とのコンサートは、エキサイティングな快演の連続。一連の大作もさることながら、R・シュトラウス《ばらの騎士》、J・シュトラウス2世《こうもり》といったオペラはとくに印象的だった。また7月のスイス・ロマンド管弦楽団との色・艶のある演奏にも感心させられた。「期待の新人」は、自己主張の明確なピアニスト3名をあげた。とくに、自分の意志を反映できる音楽だけを、たくいまれな美音で内省的に表現した鈴木愛美、持てる技術を音楽表現に転化して、的確かつ表情豊かな演奏を聴かせた奥井紫麻の今後には、大いに注目したい。



数々の名演を創り上げたジョナサン・ノット(指揮)。12年間シェフを務めた東京交響楽団の公演ほか、手兵のスイス・ロマンド管弦楽団との演奏も見事だった
©平橋 平/TSO

巨匠ムーティによるヴェルディの真髄

第1位◎リッカルド・ムーティ指揮/東京春祭オーケストラ、ヴェルディ《シモン・ボッカネグラ》 [9月15日/東京音楽大学100周年記念ホール]

- アンドラーシュ・シフ指揮/p/カペラ・アンドレア・バルカ、プログラムA [3月21日/ミュンヘン・フィルハーモニーホール]
- ベルチャ弦楽四重奏団&エペーヌ弦楽四重奏団 [3月29日/神奈川県立音楽堂]
- ルネ・ヤーコプス指揮/ビー・ロック・オーケストラ、ヘンデル《時と悟りの勝利》 [4月4日/東京オペラシティ コンサートホール]
- クラウス・マケラ指揮/バリ管、サン・サーンス&ペルリオーズ・プログラム [6月18日/ミュンヘン・フィルハーモニーホール]
- セイジ・オザワ松本フェスティバル、ブリテン《夏の夜の夢》 [8月24日/まつもと市民芸術館]
- フォーレ四重奏団、日下紗矢子(vn)、ニルス・メンケマイヤー(va) [10月4日/ TOPPANホール]
- ヘルベルト・ブロンシュテット指揮/N響、レイフ・オヴェ・アンズネス(p)、第2047回定期公演Cプログラム [10月24日/NHKホール]
- シャルル・デュトワ指揮/N響、第2049回定期公演Cプログラム [11月14日/NHKホール]
- クラウス・マケラ指揮/ロイヤル・コンサートヘボウ管、プログラムB [11月16日/ミュンヘン・フィルハーモニーホール]
- ◎ベスト・アーティスト
ジョナサン・ノット(指揮)、クラウス・マケラ(指揮)、高関 健(指揮)
- ◎期待の新人
鈴木愛美(p)、奥井紫麻(p)、中川優芽花(p)



89歳のシャルル・デュトワ。8年ぶりのNHK交響楽団との定期演奏会では、珠玉のラヴェルを聴かせた
©NHK交響楽団

齋藤弘美 Hiromi Saito

■作曲・音楽評論
演奏会数：78回

新曲の作品は問わず、演奏は常に新たな解釈や表現が求められる宿命にある。かといって奇をてらったような上っ面の演奏ではなく、聴き手に見抜かれてしまうような演奏頻度の高い名曲はいうまでもないが、初めて耳にするような珍しい作品でも、清新な感動を呼び起こすものがある。筆頭に挙げた滝千春(vn)と沼沢淑音(v)のデュオ・リサイタルは一年近く経ったいまでも感動の「鮮度」が落ちない。1990年代に持てはやされたシュニートケだが21世紀に入ってから評価というより、発掘蘇演に近い。長年秘曲復刻に励む佐藤久成(vn)やデュティエを十八番にする栗原麻樹(p)、スクリャーピンとラフマニノフを新感覚でとらえた協同洋平(p)、そしてラ・ルーチエ弦楽八重奏団による驚愕のエネスク《弦楽八重奏曲》やカーチン・ウォンと東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団によるストラヴィンスキー《バレエ音楽『春の祭典』》やカーチン・ウォン(指揮)と日本フィルハーモニー交響楽団による「ショスタコーヴィチ」交響曲第11番(1905年)など、現代の古典の演奏概念を刷新させる。さらには演奏家としての「極み」を痛感させるクアルテット・エクセルシオによる「ハイドン・セット」や小林研一郎(指揮)と日本フィルによるシベリウス《交響曲第2番》など、もはや現代日本の演奏界の成熟さを疑う余地はない。

第1位◎滝千春(vn)、沼沢淑音(v) [1月19日/すみだトリフォニーホール(小)]

- クアルテット・エクセルシオ [1月31日/J.COM浦安音楽ホール コンサートホール]
- 高関 健指揮/東京シティ・フィル、大谷康子(vn)、第378回定期演奏会 [4月5日/東京オペラシティ コンサートホール]
- 佐藤久成(vn) [5月12日/東京文化会館(小)]
- シュテファン・ヴラダー指揮、p/神奈川フィル、みなとみらいシリーズ定期演奏会第406回 [7月19日/横浜みなとみらいホール]
- 栗原麻樹(p) [8月3日/東京文化会館(小)]
- 協同洋平(p) [8月7日/東京文化会館(小)]
- カーチン・ウォン指揮/日本フィル、小川典子(p)、オッタビアーノ・クリスト・フォルイ(tp)、第774回東京定期演奏会 [10月18日/サントリーホール]
- ラ・ルーチエ弦楽八重奏団 [10月19日/東京文化会館(小)]
- 小林研一郎指揮/日本フィル、千葉清加(vn)、安達真理(va)、第775回東京定期演奏会 [11月1日/サントリーホール]
- ◎ベスト・アーティスト
高関 健(指揮)、小林研一郎(指揮)、カーチン・ウォン(指揮)
- ◎期待の新人
該当なし

シュニートケの名演が蘇った滝&沼沢のデュオ・リサイタル

國土潤一 Junichi Kokudo

■テノール、合唱指揮者、音楽評論家
演奏会数：130回

リッカルド・ムーティ(指揮)のヴェルディ《シモン・ボッカネグラ》は、わが人生で今後これに匹敵するこの曲の演奏を聴けることはないだろう、と思える圧巻の演奏であった。ムーティは、「イタリアの伝統」のひよっとしたら最後の継承者なかもしれない。筆者のヴェルディ開眼は、1976年イタリア歌劇団公演の《シモン・ボッカネグラ》であった。当時、東京藝術大学の音楽科2年生であった筆者は、「仕出し」としてその第1幕第2場の舞台に立っていた。ピエロ・カッポツチ(リッモン・ボッカネグラ)もニコライ・ギャウロフ(ヤコポ・ラウエスコ)もカーティア・リッチャレリ(マリア・ボッカネグラ)もすばらしくだったが、カルチャーショックだったのはオリヴィエロ・デ・ファブリリスの指揮だった。ピアノ・フローベで登場したその指揮は、足もとから震えかかってくるような凄まじい音楽だった。ムーティのアプローチのなかに、それと同じ筋脈を感じた。

ヴェルディ開眼体験の再来 イタリアの伝統を魅せたムーティ

第1位◎リッカルド・ムーティ指揮/東京春祭オーケストラ、ヴェルディ《シモン・ボッカネグラ》(演奏会形式) [9月15日/東京音楽大学100周年記念ホール]

- アブサラス第11回演奏会 [2024年12月16日/東京文化会館(小)]
- 野田暉行追悼演奏会 [2024年12月18日/東京文化会館(小)]
- キハラ良尚指揮/東京混声合唱団、第266回定期演奏会 [1月18日/杉並公会堂]
- びわ湖ホール、コルンゴルト《死の都》 [3月1日/滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール]
- セバスティアン・ヴァイグレ指揮/読響、ベルク《ヴォツェック》(演奏会形式) [3月12日/サントリーホール]
- ジョナサン・ノット指揮/東響、ブリテン《戦争レクイエム》 [7月19日/ミュンヘン・フィルハーモニーホール]
- 山下一史指揮/東京混声合唱団、八月のまつり46 [8月7日/第一生命ホール]
- 花岡千春(p) [9月27日/東京文化会館(小)]
- チョン・ミョンフン指揮/東京フィル、小曾根真(p)、第1025回サントリー定期シリーズ [10月16日/サントリーホール]
- ◎ベスト・アーティスト
リッカルド・ムーティ(指揮)、ジョナサン・ノット(指揮)
- ◎期待の新人
森野美咲(S)

第1位◎久保田晶子(薩摩琵琶) [2024年12月6日/東京オペラシティ リサイタルホール]

- 桑原ゆう「言祝会(ことほぎえ)」 [2024年12月1日/安養院 瑞鳴光堂]
- 第54回サントリー音楽賞受賞記念コンサート、井上道義(指揮) [2024年12月30日/サントリーホール]
- 《月に憑かれたピエロ》をめぐる冒険 [1月25日/あいおいニッセイ同和損保・フェニックスホール]
- 坂東祐大 新作ワーク・イン・プログレス「キメラ-あるはずのないメソッドの空想」 [2月22日/彩の国さいたま芸術劇場(小)]
- ルネ・ヤーコプス指揮/ビー・ロック・オーケストラ、ヘンデル《時と悟りの勝利》 [4月4日/東京オペラシティ コンサートホール]
- 第55回サントリー音楽賞受賞記念コンサート、近藤 謙(羽衣) [8月28日/サントリーホール]
- 大野和士指揮/都響、「すぎやまこういちの交響宇宙」 [10月19日/東京芸術劇場コンサートホール]
- 内田光子(p) [10月30日/サントリーホール]
- 新国立劇場、ベルク《ヴォツェック》 [11月15日/新国立劇場 オペラパレス]
- ◎ベスト・アーティスト
北村朋幹(p)、石上真由子(vn)、長谷川将山(尺八)
- ◎期待の新人
前田紀奈(vn)

岸 純信 Suminobu Kishi

■オペラ研究者
演奏会数：非公開放

批評家としての行状、それすなわち、「己の好みを排する」とと筆者は考える。人間なので多少の好き嫌いはあるが、それを脇に置いて追究し続けてこそ、新しい発想も浮かぶと思う。今回、ブリテン《夏の夜の夢》とベルク《ヴォツェック》は同点一位。どちらも、「演出上の斬新な視点」と「歌唱の安定性」が際立った。なお、世界初演の細川俊夫《ナターシャ》以外はすべて、楽譜を読み直したうえで選出。いずれも、譜面の可能性を最大限に引き出した演奏と感じられた。また、ベスト・アーティストの3名も、期待の新人人勢も全員「楽譜の読み解き」が並外れて優れていた。と睨みさせられた人々。息づかい、よく響き渡る声、声の色合いの使い分け、踏み込んだ強調法、ルパート、カデンツァの趣味のよさ、言葉の通しかたと曲想への共感、そして選曲に対する勇氣―誰か一人でも心に深く刻んでくれたならと願う姿勢―など、共演者としての誇りを、純度の高いエネルギーとして歌に投下し続ける逸材ばかりである。言い換えるならば、「自分の存在を世に知らしめるのではなく、曲の在りかたを世に知らしめる」人々なのだろう。3人ずつでは足らず、本当はあと10名ぐらい載せたいところ。「聴かせていただけで光栄です」と伝えたい。

斬新な演出が際立つオペラ 芸術家の誇りを感じる歌手陣

第1位◎セイジ・オザワ 松本フェスティバル、ブリテン《夏の夜の夢》 [8月17日/まつもと市民芸術館]

- ジョナサン・ノット指揮/東響、J.シュトラウス2世《こうもり》(演奏会形式) [4月18日/東京文化会館]
- 佐渡 裕芸術監督プロデュースオペラ2025、ワーグナー《さまよえるオランダ人》 [7月23日/兵庫県立芸術文化センター KOBELCO大ホール]
- 新国立劇場、細川俊夫《ナターシャ》 [8月11日/新国立劇場 オペラパレス]
- リッカルド・ムーティ指揮/東京春祭オーケストラ、ヴェルディ《シモン・ボッカネグラ》(演奏会形式) [9月15日/東京音楽大学100周年記念ホール]
- ウィーン国立歌劇場、R.シュトラウス《ばらの騎士》 [10月20日/東京文化会館]
- 藤沢市民オペラ、モーツァルト《羊飼いの王様》 [11月9日/藤沢市民会館]
- 新国立劇場、ベルク《ヴォツェック》 [11月15日/新国立劇場 オペラパレス]
- NISSAY OPERA、マスネ《サントリオン》 [11月16日/日生劇場]
- 北とびあ国際音楽祭2025、ヘンデル《ロドリング》(セミ・ステージ形式) [11月30日/北とびあさくらホール]
- ◎ベスト・アーティスト
エリーナ・ガランチャ(Ms)、山下裕賢(Ms)、田崎尚美(S)
- ◎期待の新人
カタリナ・コンラディ(S)、田中絵里加(S)、黒田祐真(Br)

小室敬幸 Takayuki Komuro

■音楽ライター
演奏会数：90回

この文章を執筆している時点で、ちょうど1年前の公演だが、いまから振り返ってもこれほど鮮やかな公演はほかになく、第1位に選んだ。トクナクに演目だけで薩摩琵琶の歴史を概観。そのうえ、二つの新作で見事に未来を明るく照らした企画力に脱帽した。もう少し具体的にいえば、武満徹・間宮芳生・藤倉大と作曲年代は遠くまで、現代音楽では器楽としての琵琶にはかつて着目されてきたことを明らかにしつつ、古典で聴かされた「語り」という久保田晶子の強みを活かした向井響の新作によって、まったく異なる観点で器楽としての琵琶の可能性を広げた山本和智の新作によって、現代的な価値観で薩摩琵琶の可能性を切り開いた。ベスト・アーティストは、ピアノでも、新しく挑戦した指揮でも、挑戦的でありながら説得力のある音楽を提示した北村朋幹に捧げたい。次いで、どの公演でもアンサンブルを巧みに引き上げながら、ソロとしての存在感も発揮した石上真由子(vn)、坂東祐大の個展と自身のリサイタルで圧倒的な存在感を示した長谷川将山(尺八)を挙げたい。期待の新人には、「コンクールの後に若手らしからぬ深化をみせつつある前田紀奈(vn)」を推そう。なお9月以降は、仕事の都合で聴けた公演数が激減し、全体で90回程度となった。

企画力に脱帽 薩摩琵琶の可能性を切り開く

第1位◎石上真由子 (vn) & 中 恵菜 (va) & 佐藤晴真 (vc)
[5月21日 / Hakuju Hall]

- 藤田真央 (p) [2024年12月12日 / サントリーホール]
●オーケストラ・ニッポンニカ、第45回演奏会 [2024年12月22日 / 日本製鉄紀尾井ホール]
●郷古 康 (vn)、加藤洋之 (p) [4月2日 / 東京文化会館 (小)]
●森谷真理 (S) [6月13日 / 王子ホール]
●北村朋幹 プロデュース、シェーンベルク《月に憑かれたピエロ》 [6月16日 / サントリーホール (小)]
●セイジ・オザワ 松本フェスティバル、プリテン《夏の夜の夢》 [8月17日 / まつもと市民芸術館]
●第55回サントリー音楽賞受賞記念コンサート、近藤 譲《羽衣》 [8月28日 / サントリーホール]
●新国立劇場、ベルク《ヴォツェック》 [11月18日 / 新国立劇場 オペラ・バレス]
●北とびあ国際音楽祭2025、ヘンデル《ロデリンダ》(セミ・ステージ形式) [11月30日 / 北とびあさくらホール]

◎ベスト・アーティスト
郷古 康 (vn)、與石まりあ (Ms)、永野英樹 (p)
◎期待の新人
久末 航 (p)

戸部 亮 Akira Tobe

■音楽評論家
演奏回数: 138回

約30年ぶりの来日公演
ルネ・ヤール・コプス(指揮)は欧州ではすでに巨匠級。他方日本では古楽好きやコンサート・コア以外には、ひどい場合はまだカウンタートナーの印象も強い。現代の巨星への評価は明らかに日欧ギャップが生じていた。そうなるに至った理由はただ一つ、来日公演がなかったためだ。約30年ぶりの来日となった公演で、ヤール・コプスが比類なき高みに達した音楽家であることをはっきりと証明した。
古楽のイデオロムと個人の能力とアンサンブルのクオリティが極めて高水準にあるピエロ・ロック・オーケストラと歌手。それらの土台があって、作劇性が高いヤール・コプスの美辞が耳事に展開される。オーケストラも歌手もリアリズムを無為自然のごとく構成させていく。ヘンデル作品のエンタメ性を示しつつ、まさにMECE(必要要素を漏れなくタプリーなく)達成された完全体。
筆者は本公演が発表された段階で確信に2025年のベスト・コンサートになると考えていた。ただ期待値が高い場合、些細なほころびがあったら期待外れの烙印を押しがち。しかし今回は違わず。期待値通りの最高のヘンデルを魅せたヤール・コプス。やはり彼は現代最高フランクの巨匠である。

第1位◎ルネ・ヤール・コプス指揮/ビー・ロック・オーケストラ、ヘンデル《時と悟りの勝利》
[4月4日 / 東京オペラシティ コンサートホール]

- ジョヴァンニ・アントニーニ指揮/イル・ジャルディーノ・アルモニコ [2024年12月13日 / TOPPANホール]
●レナード・スラットキン指揮/都響、金川真弓 (vn)、都響スペシャル [1月15日 / サントリーホール]
●ヴィットリオ・グリゴロ (T) [3月15日 / 東京文化会館]
●クリスティアン・ゲルハール (Br) & ゲオルト・フーバー (p) [3月22日 / 東京文化会館 (小)]
●ベルチャ 弦楽四重奏団 & エベラ 弦楽四重奏団 [3月28日 / TOPPANホール]
●リカルド・ムーティ指揮/東京春祭オーケストラ、ヴェルディ《シモン・ボッカネグラ》(演奏会形式) [9月13日 / 東京音楽大学 100周年記念ホール]
●西村 朗 トリビュート・コンサート [9月24日 / 東京オペラシティ リサイタルホール]
●ウィーン国立歌劇場、R.シュトラウス《ばらの騎士》 [10月26日 / 東京文化会館]
●クリスティアン・ツィメルマン (p) [11月29日 / 所沢ミュージクス・アークホール]

◎ベスト・アーティスト
ヘルベルト・ブロムシュテット(指揮)、エフゲニー・キーシン(p)、ペトル・ボベルカ(指揮)
◎期待の新人
タルモ・ベルトコスキ(指揮)、中江万由子(S)、ユアン・シールズ(指揮)

長木誠司 Seiji Choki

■音楽学者
演奏回数: 241回

大活躍のソリスト集う弦楽トリオ
燃焼度の高い演奏に感銘!
例年どおり来日公演は外し、国内独自の公演に限定してある。通算4月ほど可能性はある。石上真由子(VN)、中恵菜(VA)、佐藤晴真(VC)のトリオは2024年のシェーンベルクを聴き逃したので、ようやく聴くことができ、ヒンデミット作品の硬質だが燃焼度の高い演奏に深い感銘を受けた。トリオの名前がほし。郷古康(VN)のソロは、プログラムへのこだわりと演奏の完成度において、所属する某楽団をはるかに超えている。超人気の藤田真央(p)は、それに漏れぬ唯我独尊的なところがある。オペラでは、二つのヘンデル《ロデリンダ》公演があったのが珍しいが、歌手の能力に匹敵した快活なテンポで通した北とびあ国際音楽祭が圧倒的だった。新国立劇場は世界初演もあったようだが、ベルク《ヴォツェック》の歌唱・演奏・舞臺のすばらしさ、この劇場で久々に快哉を叫んだ。演奏家では、永野英樹(p)のリサイタルでの驚異的な妙技に強い印象。ヘンデル《ロデリンダ》に出演したメソソソノンの與石まりあにも音楽・演技両面で大きな存在感を感じた。ピアノの久末航を「新人」と呼べるかどうかかわからないが、彼の場合は実演ではなく、CDリリースされたテュバンのエテノードがすばらしかった。ここでここに挙げておく。

寺西基之 Motoyuki Teranishi

■音楽評論家
演奏回数: 303回

表現に深みと陰影が加味された
名匠XN響の至芸
11月は3つの外来の名門オーケストラがそれぞれの持ち味を生かした名演を聴かせてくれたが、ベストワンとしてはそれらと同時期に来日したシャル・デュワが振ったNHK交響楽団の定期公演ラウエル・プログラムを挙げたい。彼のN響定期の登壇は2017年以來だが、その指揮ぶりは89歳とは思えない明快極まりないもので、N響から鮮やかな色彩感と生き生きとしたリズム感を引き出す手腕は相変わらず、さらにそこに以前にもまして表現に深みと陰影が加味された印象だ。とりわけ一分の隙のない細部の緻密さとダイナミックな推進力に満ちた躍動性とが一体となったラウエル《タフニスとクロエ》全曲版は圧巻だった。この演奏と甲乙つけがたかったのが、その前月のやはりN響定期でヘルベルト・ブロムシュテットが振ったメンデルスゾーン「交響曲第2番《讃歌》」で、98歳のタクトが生み出した至高の世界は筆舌に尽くしがたいものがあった。個人的に関わっている団体なのでベストテンには挙げられなかったが、東京交響楽団をヨナサン・ノットが振ったプリテン《戦争レクイエム》も忘れがたい名演。というところでベスト・アーティストとして以上の3人の指揮者を選んだ次第。いっぽう、期待の若手として挙げた3人は技巧・表現力ともに飽くなきチャレンジ精神を評価しての人選である。

第1位◎シャル・デュワ指揮/N響、第2049回定期公演Cプログラム
[11月14日 / NHKホール]

- アンドラーシュ・シフ (p) [2024年12月16日 / 東京オペラシティ コンサートホール]
●沼尻竜典指揮/静岡祝祭管、R.シュトラウス《ナクソス島のアリアドネ》(演奏会形式) [5月11日 / 静岡音楽館AOI]
●石上真由子 (vn) & 中 恵菜 (va) & 佐藤晴真 (vc) [5月21日 / Hakuju Hall]
●ミハイル・ブレトニョフ (p) [6月4日 / サントリーホール]
●リカルド・ムーティ指揮/東京春祭オーケストラ、ヴェルディ《シモン・ボッカネグラ》(演奏会形式) [9月15日 / 東京音楽大学 100周年記念ホール]
●ヘルベルト・ブロムシュテット指揮/N響、第2046回定期公演Aプログラム [10月18日 / NHKホール]
●クリスティアン・ティーレマン指揮/ウィーン・フィル、ブルックナー「交響曲第5番」 [11月11日 / サントリーホール]
●クラウス・マケラ指揮/ロイヤル・コンセルトヘボウ管、Bプログラム [11月16日 / ミューザ川崎シンフォニーホール]
●キリル・ベトレンコ指揮/ベルリン・フィル、プログラムA [11月20日 / 横浜みなとみらいホール]

◎ベスト・アーティスト
ヘルベルト・ブロムシュテット(指揮)、シャル・デュワ(指揮)、ヨナサン・ノット(指揮)
◎期待の新人
阪田知樹(p)、石上真由子(vn)、上野通明(vc)

白石美雪 Miyuki Shiraishi

■音楽学・音楽評論
演奏回数: 126回

ウィーン国立歌劇場の生舞台
風刺も際立つ《フィガロの結婚》
人間的な、あまりに人間的なモーツァルト《フィガロの結婚》に心底、魅せられた。すばらしい動作とびたりリズムを合わせた歌が登場人物たちに生の輝きをもたらす。9年ぶりとなるウィーン国立歌劇場の来日公演である。パリ・コスキー演出のプロダクションはすでに2023年に初演され、放送でも取り上げられたものだ。それにもかかわらず、このスピード感覚と鋭く現代を衝く風刺も、生の舞台上に直接触れることで強烈なものとなった。オペラは新作・新制作ともに豊作で、とりわけ大野和士指揮、リチャード・ジョーンズ演出のベルク《ヴォツェック》が秀逸。本来のタイトルロールだったトマス・ヨハネス・マイヤー(Br)を聴きたかったものの、駒田敬章(Br)も力量を発揮した。ベスト・アーティストは今季で東京交響楽団を去るヨナサン・ノット(指揮)とパリ管弦楽団およびロイヤル・コンセルトヘボウ管弦楽団と来日した絶好調のクラウス・マケラ(指揮)。ノットは10選にHIMARI(Vn)が協奏曲を演奏したスイス・ロマンド管弦楽団との来日を挙げたが、11月に最後の東響定期演奏会で触れた重宝の演奏と聴衆の様子、ノットがオーケストラと重ねてきた12年におよぶ貴重な日々を実感させた。新人はピアニストおよび作曲家として、内外で積極的な活動を展開する小倉美春、近作が印象的だった二人の作曲家を挙げた。

第1位◎ウィーン国立歌劇場、モーツァルト《フィガロの結婚》
[10月5日 / 東京文化会館]

- マレク・ヤノフスキ指揮/N響、ワーグナー《パルジファル》(演奏会形式) [3月30日 / 東京文化会館]
●ルネ・ヤール・コプス指揮/ビー・ロック・オーケストラ、ヘンデル《時と悟りの勝利》 [4月4日 / 東京オペラシティ コンサートホール]
●ゲオルク・フリードリヒ・ハースの音楽、コンポーザム2025 [5月22日 / 東京オペラシティ コンサートホール]
●北村朋幹 プロデュース、シェーンベルク《月に憑かれたピエロ》 [6月16日 / サントリーホール (小)]
●クラウス・マケラ指揮/パリ管、ラヴェル・プログラム [6月20日 / サントリーホール]
●ヨナサン・ノット指揮/スイス・ロマンド管、HIMARI (vn)、プログラムB [7月9日 / サントリーホール]
●セイジ・オザワ 松本フェスティバル、プリテン《夏の夜の夢》 [8月24日 / まつもと市民芸術館]
●ハーゲン・クアルデット、イェルク・ヴィトマン (cl) [11月13日 / TOPPANホール]
●新国立劇場、ベルク《ヴォツェック》 [11月22日 / 新国立劇場 オペラバレス]



初演から100年のベルク《ヴォツェック》。新国立劇場で上演されたリチャード・ジョーンズ演出の舞台は、現代社会の問題に訴えかけるものであった

◎ベスト・アーティスト
ヨナサン・ノット(指揮)、クラウス・マケラ(指揮)
◎期待の新人
小倉美春(p、作曲)、石川健人(作曲)、金田望(作曲)



2025年1月18日にこの世を去ったピアニストの藤井一興。最後の公演となったフォーレ室内演奏会には極上の音世界が繰り広げられた

柴田龍一 Ryuichi Shibata

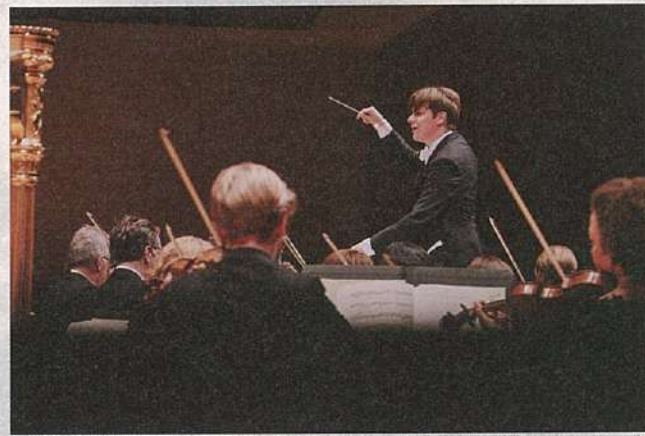
■音楽評論家
演奏回数: 非公開放

藤井一興、最後のコンサート
至高の境地を極めたフォーレ
藤井一興は、まさに非凡なアンサンブル・ピアニストであり、その極度にシャープな耳と不思議なタッチを生かし、他者の追従を許すことのない至高の境地を極めていた。彼の死の10日前に開催された「藤井一興フォーレ室内演奏会」は、高熱を押しつけて無謀に開催されたコンサートでもあったという。しかし、後半では、流石に疲労がたつていたものの、前半では、彼の神技が縦横に展開され、独特の万華鏡を想わせるような浮世離れした音の世界が繰り広げられていた。とくにフルートとの共演によるフォーレの2曲や自作では、藤井の意図に率直に感応した紫園香のフルートともあいまって、倍音の響きもかきこえたようなデュオが実現されており、そこに虹が現れたようなまじりたない演奏がレアリゼされていた。さほどの年齢ではなかったのに、彼の死は惜しんでも惜しみ切れないものがあった。ネルソン・ゲルナーは、小柄な老人であるにもかかわらず、ラフマニノフの最も至難な協奏曲を驚くほどピアノスティックに演奏した。レオニダス・カヴァコス(Vn)の度肝を抜くような熟練も印象に残る。期待の新人である黒木雪音(p)は、その驚異的なテクニックを自在に駆使し、彼女が本場に本物の例外的な逸材であることを伝えていた。

第1位◎藤井一興 (p)
[1月8日 / 豊洲シビックセンターホール]

- ミハイル・ブレトニョフ指揮/東京フィル、松田華音 (p)、第1016回オーチャード定期演奏会 [5月11日 / Bunkamuraオーチャードホール]
●黒木雪音 (p) [5月14日 / 日本製鉄紀尾井ホール]
●マリオ・フルネロ指揮/vc/東響、東京オペラシティシリーズ第145回 [6月21日 / 東京オペラシティ コンサートホール]
●シルヴァン・カンブルラン指揮/読響、北村朋幹 (p)、第650回定期演奏会 [7月8日 / サントリーホール]
●アンドレア・バッティストニ指揮/東京フィル、第173回東京オペラシティ定期シリーズ [9月12日 / 東京オペラシティ コンサートホール]
●今川映美子 (p) [11月5日 / 王子ホール]
●藤井一興メモリアル [11月7日 / ルーテル市ヶ谷ホール]
●ビエタリ・インキネン指揮/読響、ピョートル・アンドルシェフスキ (p)、第653回定期演奏会 [11月27日 / サントリーホール]
●ファビオ・ルイーザ指揮/N響、レオニダス・カヴァコス (vn)、第2051回定期公演Aプログラム [11月30日 / NHKホール]

◎ベスト・アーティスト
ネルソン・ゲルナー (p)、レオニダス・カヴァコス (vn)
◎期待の新人
黒木雪音 (p)



世界を席巻する天才指揮者クラウス・マケラ。2025年はバリ管弦楽団&ロイヤル・コンサートヘボウ管弦楽団と来日した ©Taichi Nishimaki

松本良一 Ryoichi Matsumoto

■読売新聞記者
演奏会数：170回

これほどまでに高純度、高純度のマラーが実演で聴けるとは思っていなかった。クラウス・マケラ（指揮）ロイヤル・コンサートヘボウ管弦楽団による「交響曲第5番」そのナラティブの驚くべき完成度は、作曲家の企てを超えた「美」を顕現させ、白昼夢を見るかのようだった。80歳を迎えたアレクセイ・リュビモフの指から紡がれたシルヴェストロス・モーツァルト、ドビュッシーは、幽明の境を往還する小舟のようにはない。小舟はアンコールのシバン「舟歌」で、ピアノ演奏の極致に行き着いた。東京都交響楽団に客演したリッカルド・ミナーシ（指揮）は、作曲家を「降霊」させるかのような入魂の技を披露。ペーデー作曲第6番（田園）では、曲にまつる通俗、凡庸な物語を吹き飛ばす鮮烈な響きを高揚させた。セイジ・オザワ 松本フェスティバルでのプリテン《夏の夜の夢》のロラン・ペリー演出は、宙を浮遊する妖精のごとく幻想的だった。ほのカルテットののみみずしいグリーク「弦楽四重奏曲、鈴木愛美（p）の「フォーレ」主題と変奏」の絶妙なテンポ感、ウクライナの俊英ドミトロ・ウドヴィチェンコ（vn）が聴かせたシオスタコヴィチ「ヴァイオリン・ソナタ」の悲痛な叫び……いずれも忘れがたい。

第1位◎クラウス・マケラ指揮/ロイヤル・コンサートヘボウ管、プログラムB

- フランチェスコ・コルティ指揮/イル・ボモドーロ [11月21日/日本製鉄尾井ホール]
- ベルチャ弦楽四重奏団 [3月27日/TOPPANホール]
- アレクセイ・リュビモフ (p) [4月17日/五反田文化センター音楽ホール]
- ジョナサン・ストックハンマー指揮/読響、コンポーザム 2025 [5月22日/東京オペラシティコンサートホール]
- セイジ・オザワ 松本フェスティバル、プリテン《夏の夜の夢》 [8月17日/まつもと市民芸術館]
- リッカルド・ミナーシ指揮/東京交響楽団、ヴェルディ《シモン・ボッカネグラ》(演奏会形式) [9月15日/東京音楽大学100周年記念ホール]
- 新国立劇場、ベルク《ヴォツェック》 [11月15日/新国立劇場オペラパレス]
- キリル・ベトレンコ指揮/ベルリン・フィル、プログラムB [11月23日/サントリーホール]
- リッカルド・ミナーシ指揮/都響、庄司紗矢香 (vn)、第1029回定期演奏会Cシリーズ [11月29日/東京芸術劇場コンサートホール]
- ◎ベスト・アーティスト
クラウス・マケラ (指揮)、アレクセイ・リュビモフ (p)、リッカルド・ミナーシ (指揮)
- ◎期待の新人
ほのカルテット、鈴木愛美 (p)、ドミトロ・ウドヴィチェンコ (vn)

満津岡信育 Nobuyasu Matsuoka

■音楽評論家
演奏会数：非公開

八面六臂の活躍をした ハインツ・ホリガー

コンサート・ベストテンの第1位に挙げたハインツ・ホリガーは、すぐれた指揮者であると同時に、存在感のある作曲家、そして、オーボエの名手である。今回、京都市交響楽団との定期演奏会では、自作の《エリス》を舞台下手に配したピアノのみから演奏し、その後、指揮台にのぼって同曲の管弦楽版を振るかたちを採り、リストの晩年期的作品に基づく自作《灰色の雲》、《不運》、武満徹《夢窓》、シューマン「交響曲第1番《春》」も、じつじつと印象的であった。今回は、この京都と東京（新日本フィルハーモニー交響楽団）で1回ずつ接することができたのであるが、筆者にとってのベスト・アーティストも、当然のことながら、ハインツ・ホリガーである。ベスト・アーティストの第2位に挙げた佐藤俊介（vn）は、ヴァイオリニストとして、ペーター・ウエンのヴァイオリン・ソナタの衝撃的な演奏が出色であり、指揮者としてもモダン・オーケストラから熱烈な響きを引き出すことができている点を評価したい。フォルテピアノのスーアン・チャイとのデュオを評価するコンピネーションもすばらしい。期待の新人は、期せずしてピアノリストを二人選んでしまったが、中川優芽花（p）も鈴木愛美（p）も、コンクール向きの整った演奏に留まることなく、演目への愛と豊かな息吹を感じ取れる点が好ましい。

第1位◎ハインツ・ホリガー (指揮、p) / 京響、第700回定期演奏会

- セバスティアン・ヴァイクレ指揮/読響、ベルク《ヴォツェック》(演奏会形式) [3月12日/サントリーホール]
- 川瀬賢太郎指揮/名古屋フィル、第95回市民会館名曲シリーズ [3月29日/日本特殊陶業市民会館フォレストホール]
- ジョナサン・ノット指揮/東響、J.シュトラウス2世《こうもり》(演奏会形式) [4月18日/東京文化会館]
- 太田 弦指揮/仙台フィル、ヤメン・サーティ (vn)、第381回定期演奏会 [4月19日/日立システムズホール仙台コンサートホール]
- 佐渡 裕指揮/新日本フィル、第662回定期演奏会 [4月20日/サントリーホール]
- カーチン・ウオン指揮/日本フィル、ステイヴン・ハフ (p)、第770回東京定期演奏会 [5月9日/サントリーホール]
- 高岡 健指揮/東京シティ・フィル、第381回定期演奏会 [9月6日/東京オペラシティコンサートホール]
- 大植英次指揮/神奈川フィル、みなとみらいシリーズ定期演奏会第409回 [11月15日/横浜みなとみらいホール]
- フアビオ・ルイジ指揮/N響、レオニダス・カヴァコス (vn)、第2051回定期演奏会Aプログラム [11月29日/NHKホール]
- ◎ベスト・アーティスト
ハインツ・ホリガー (指揮、作曲、ob)、佐藤俊介 (vn)、スーアン・チャイ (fp)
- ◎期待の新人
中川優芽花 (p)、鈴木愛美 (p)



第12回浜松国際ピアノコンクールで日本人初優勝を果たした鈴木愛美

真嶋雄大 Yudai Majima

■音楽評論家
演奏会数：166回

圧倒的な実力を見せつけた ベルリン・フィル2度の来日公演

ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団は2025年、2度の来日を果たした。7月の河口湖ステラシアターにおける、ドイツ以外世界初のヴァルトビューネであり、指揮はグスターボドウタメル、ロケーションやプログラムも大変楽しまれたが、11月の公演ではキリル・ベトレンコ (指揮) によるバルトーク《中国の不思議な夜》(組曲)とストラヴィンスキー《バレエ音楽「ペトル・シユカド」》(947年改訂版) は、まさに準備しき、きわめて壮大で鮮烈、しかも生命力にあふれた説得力が驚異的だった。クラウス・マケラ (指揮) も6月にはバリ管弦楽団とのベルリオス《幻想交響曲》で色彩が乱舞する絶妙の演奏を聴かせたが、今回ロイヤル・コンサートヘボウ管弦楽団とのプログラム「ピアノ」協奏曲第1番ではアレクサンドル・カントロフ (p) が重厚かつ抒情的なドラマを構築。マケラも見事なアンサンブルでそれに応えたため、こちらを挙げた。またクリスティアン・ティールマン (指揮) も今回はシューマンやブラームスに力任せの荒業ではなく、しっとりとしたみずみずしい響きをウイン・フィルハーモニー管弦楽団から引き出していた。ピアノでは第12回浜松国際ピアノコンクール優勝の鈴木愛美が深々とした探究に根ざした芳醇なピアノ・ソナタで圧倒、同世代のピアノリストにおいても抜き出た演奏を示した。同様に中川優芽花 (p) も独自の歩みやアプローチでほかとは一線を画す存在だ。そして、東京都交響楽団との共演でシューマン「ヴァイオリン協奏曲」を鮮やかに弾き切った庄司紗矢香 (vn) もじつじつ心に残った。

第1位◎キリル・ベトレンコ指揮/ベルリン・フィル、プログラムA

- 小山実穂恵 (p)、矢部達哉 (vn)、宮田 大 (vc) [2月15日/第一生命ホール]
- 河村尚子 (p)、岡本誠司 (vn)、赤坂智子 (va) 伊藤悠貴 (vc) [4月25日/王子ホール]
- ゼフィルス・ピアノ五重奏団、第6回定期演奏会 [7月31日/TOPPANホール]
- エマニュエル・バユ (fl) & エリック・ル・サージュ (p) [9月26日/王子ホール]
- 郷古 廉 (vn)、横坂 源 (vc)、北村幹幹 (p) [9月28日/浜離宮朝日ホール]
- 鈴木愛美 (p) [10月31日/東京オペラシティコンサートホール]
- クリスティアン・ティールマン指揮/ウイン・フィル、ブラームス、他 [11月12日/サントリーホール]
- クラウス・マケラ指揮/ロイヤル・コンサートヘボウ管、アレクサンドル・カントロフ (p)、プログラムA [11月17日/サントリーホール]
- リッカルド・ミナーシ指揮/都響、庄司紗矢香 (vn)、第1029回定期演奏会Cシリーズ [11月29日/東京芸術劇場コンサートホール]
- ◎ベスト・アーティスト
キリル・ベトレンコ (指揮)、河村尚子 (p)、庄司紗矢香 (vn)
- ◎期待の新人
鈴木愛美 (p)、中川優芽花 (p)



2023年以来2度目の来日公演を行ったキリル・ベトレンコ (指揮)。ベルリン・フィルの魅力を目最大限に引き出していた ©Monika Rittershaus



現代的な再解釈によるモーツァルト「歌劇《フィガロの結婚》」でウイン国立歌劇場が魅せた ©Kiyonori Hasegawa

堀内修 Osamu Horiuchi

■音楽評論家
演奏会数：82回

2025年の大事件 ウイン国立歌劇場のオペラ

待っていたのはミラノからミラノ・スカラ座、パリからはパリ国立オペラと、名だたる歌劇場が東京をめざしてやってくる。そんな過去の栄華がよみがえった。ウイン国立歌劇場が上演した二つのオペラは、2025年の大事件だった。庄司紗矢香が主演するモーツァルト《フィガロの結婚》。一瞬もドラマの進行が滞らないバリー・コースキ演出の舞台と、申しぶんないモーツァルト歌手の歌、そしてペトル・ド・ピリ指揮するウインの管弦楽の生み出す優雅に酔うような、客席は愛と政治とエロスの現代劇《フィガロの結婚》の真つたなかに導かれる。失われた夫の愛を嘆く女から、自分の力でその愛を取り戻す女への変身を実現させた伯爵夫人のハンナ・エリザベット・ミュラーを、やっぱりベストに選んでしまっ。でも、この秋最も活躍したのは、まず東京都交響楽団のJ.S.バッハ《マタイ受難曲》のソフランとして登場し、ウイン国立歌劇場の公演では《フィガロの結婚》のスタンナとR・シュトラウス《ばらの騎士》のソフランを歌ったカタリナ・コンラディだ。指揮者ならベルク《ウオツェック》と細川俊夫《チタリヤ》で新国立劇場にウオツェック、日本の若手ならシェーンベルク《月に憑かれたピエロ》の中江早希 (S)、スミス・ロマンD管弦楽団とシオスタコヴィチを弾いた上野通明 (vc) だ。

第1位◎ウイン国立歌劇場、モーツァルト《フィガロの結婚》

- クリスティアン・カルク (S) [2024年12月3日/王子ホール]
- バンジャマン・ベルナイン (T) [1月14日/東京文化会館]
- マレク・ヤノフスキ指揮/N響、ワーグナー《パルジファル》(演奏会形式) [3月27日/東京文化会館]
- ルネ・ヤーコブス指揮/ビー・ロック・オーケストラ、ヘンデル《時と悟りの勝利》 [4月4日/東京オペラシティコンサートホール]
- 北村幹幹プロデュース、シェーンベルク《月に憑かれたピエロ》 [6月16日/サントリーホール (小)]
- 東京二期会、チャイコフスキー《イオランタ》、《くるみ割り人形》 [7月18日/東京文化会館]
- セイジ・オザワ 松本フェスティバル、プリテン《夏の夜の夢》 [8月20日/まつもと市民芸術館]
- ウイン国立歌劇場、R.シュトラウス《ばらの騎士》 [10月20日/東京文化会館]
- 新国立劇場、ベルク《ヴォツェック》 [11月15日/新国立劇場オペラパレス]
- ◎ベスト・アーティスト
ハンナ・エリザベット・ミュラー (S)、フィリップ・ジョルダン (指揮)、大野和士 (指揮)
- ◎期待の新人
カタリナ・コンラディ (S)、中江早希 (S)、上野通明 (vc)



幻想的な世界へ誘った、セイジ・オザワ 松本フェスティバルのプリテン「歌劇《夏の夜の夢》」 ©山田純子/2025OMF

吉田純子 Junko Yoshida

■朝日新聞編集委員
演奏会数：非公算

夢を見せるオペラの本懐を、あらためて突き付けられた。オペラという芸術の現代的意義も存分に示された。演奏会形式の公演が支持されることに、それなりの理由があるのはよくわかる。しかし、いまという時代の風景をとりいれ、様々なジャンルの人々の想像力、協働の精神を得てこそ、やはりオペラは未来に継がれるものであると、見る人すべてを幸福にするロラン・ペリーの演出の力に説得された。バックを演じたダンサー、フェイス・ブレンダーガストの地上の重力を感じさせない演技にも、男性歌手たちによるドリフばりの軽妙な田舎芝居にも、それぞれのプロの技でシェイクスピアの言葉の魔法に一気に心を持っていかれた。「芸術は長く、人生は短い」と言ったのは坂本龍一だが、モーツァルトしかり、ベートーヴェンしかり、誇いた種のほんとうの芽吹きを見ることのできないというのが芸術家の性である。オペラに命を懸けた小澤征爾の真の思いも、彼が遺した松本の音楽祭でこれから花開いていくのかも知れない。

第1位◎セイジ・オザワ 松本フェスティバル、プリテン《夏の夜の夢》

- ローター・ツァグロゼク指揮/読響、第274回土曜マチネシリーズ [2月1日/東京オペラシティコンサートホール]
- hitaru オペラプロジェクト、モーツァルト《ドン・ジョヴァンニ》 [3月9日/札幌文化芸術劇場 hitaru]
- ルネ・ヤコブス指揮/ビー・ロック・オーケストラ、ヘンデル《時と悟りの勝利》 [4月4日/東京オペラシティコンサートホール]
- 坂野明日香 (p) [5月21日/東京文化会館 (小)]
- トーマス・ヘル (p) [5月26日/ TOPPAN ホール]
- ジョナサン・ノット指揮/東響、プリテン《戦争レクイエム》 [7月19日/ミュンヘン・フィルハーモニーホール]
- クリスティアン・アルミンク指揮/広響、シン・ティスカリール・シリーズ (ヒロシマとモーツァルト) 第2回 [7月24日/JMS アステールプラザ]
- ジョルジュ・アベルギス室内楽ポर्टレイト、サントリーホール サマーフェスティバル2025 [8月24日/サントリーホール (小)]
- 権代敦彦ピアノの世界 [11月7日/東京オペラシティリサイタルホール]
- ◎ベスト・アーティスト 棄権
- ◎期待の新人 棄権

山田治生 Haruo Yamada

■音楽評論家
演奏会数：280回

高水準の舞台を松本から発信 音楽&演劇で魅了

セイジ・オザワ 松本フェスティバルのプリテン《夏の夜の夢》は、まさに世界レベルの舞台を松本から発信するものであり、その意味で小澤征爾の遺志を継ぐプロダクションであったといえる。沖澤のどかの指揮は、キレがよく、明確でドラマをアンボよく進める。サイトウ・キネン・オーケストラが名演。ロラン・ペリーの演出は、宙吊りや鏡を用い、バルコニー席まで使った、空間的な広がりがある。モダンであり、かつ、幻想的。個々の歌手への演技の徹底もなされ、動きが美しい。海外から招聘されてきた歌手たちがいずれも高水準。演技力も優れ、音楽的にも演劇的にも魅了された。とりわけオーペロンに仕えるバック役、演技のフェイス・ブレンダーガストが印象的。沖澤の指揮は、京都市交響楽団で聴いたR・シュトラウス《英雄の生涯》も見事であった。今シーズンで東京交響楽団の音楽監督を退任するジョナサン・ノットが大活躍。R・シュトラウス《はらの騎士》とプリテン《戦争レクイエム》はコンビの集大成といえる名演。山下裕賀 (Ms) は細川俊夫《ナターシャ》、R・シュトラウス《ナクソス島のアリアドネ》、リサイタルなどで感銘を受ける。山下愛陽 (g) はリサイタルでの完成度の高さに驚嘆。タルモ・ベルトコススキのNHK交響楽団を指揮しての日本デビューに衝撃を受けた。

第1位◎セイジ・オザワ 松本フェスティバル、プリテン《夏の夜の夢》

- ジョナサン・ノット指揮/東響、R.シュトラウス《はらの騎士》(演奏会形式) [2024年12月15日/ミュンヘン・フィルハーモニーホール]
- 濱田芳通指揮/アントネッロ、モンテヴェルディ《オルフェオ》 [2月23日/神奈川県立音楽堂]
- ジョナサン・ノット指揮/東響、プリテン《戦争レクイエム》 [7月19日/ミュンヘン・フィルハーモニーホール]
- 新国立劇場、細川俊夫《ナターシャ》 [8月13日/新国立劇場 オペラパレス]
- リッカルド・ムーティ指揮/東京春祭オーケストラ、ヴェルディ《シモン・ボッカネグラ》(演奏会形式) [9月15日/東京音楽大学100周年記念ホール]
- ヘルベルト・ブロムシュテット指揮/N響、第2046回定期公演Aプログラム [10月18日/NHKホール]
- グスターボ・ドゥダメル指揮/ロサンゼルス・フィル、マラー《復活》 [10月25日/サントリーホール]
- クラウス・マケラ指揮/ロイヤル・コンサートヘボウ管、Bプログラム [11月16日/ミュンヘン・フィルハーモニーホール]
- キリル・ベトレンコ指揮/ベルリン・フィル、プログラムA [11月19日/サントリーホール]
- ◎ベスト・アーティスト ジョナサン・ノット (指揮)、沖澤のどか (指揮)、山下裕賀 (Ms)
- ◎期待の新人 山下愛陽 (g)、タルモ・ベルトコススキ (指揮)



2000年生まれの新星指揮者タルモ・ベルトコススキ。NHK交響楽団との共演で衝撃的な日本デビューを飾った ©Peter Rigaud

道下京子 Kyoko Michishita

■音楽評論家
演奏会数：非公算

ベートーヴェンの鋭いアプローチ ベートーヴェンで独特な作品像を創出

2025年については、シヨハン国際ピアノコンクールの関係で、いつもよりもピアノ系の演奏会に多く足を運んだ。ベスト・コンサートにあげたのは、ミハイル・プレトニョフ (p) のベートーヴェンとクリグの作品によるリサイタル。作曲家やその作品に鋭くアプローチし、彼らの生きた時代に聴く者を深くいざなうような演奏であった。ベートーヴェンの「第8番《悲愴》」&「第14番《月光》」のピアノ・ソナタでは、独特な作品像を創出した。そして、透き通るようなリシズムに満ちたクリグ《抒情小品集》(抜粋)。その演奏には、郷愁と憂鬱が繊細に交錯する。87歳の深沢亮子 (p) のオール・モーツァルトによるリサイタルもすばらしかった。気品に満ちた美しく典雅な世界を創出し、庄巻のテクニクと表現を披露。「前奏曲」をテーマとした藤田真央 (p) のリサイタルも特筆に値する。



イル・ジャルディーノ・アルモニコとモーツァルトのヴァイオリン協奏曲全曲披露し、作品の真髄を伝えたイザベル・ファウスト ©大塚道治 (提供:東京オペラシティ文化財団)

山崎浩太郎 Kotaro Yamazaki

■演奏史蹟
演奏会数：212回

モーツァルトの協奏曲の極意

イザベル・ファウストが26年ぶりに来日したイル・ジャルディーノ・アルモニコと共演して、ピアノ協奏曲と奏法で演奏したモーツァルトのヴァイオリン協奏曲全曲は、「協奏曲」というジャンルを教えるに似て、音楽することの愉悅に満ちた、親密で生気にあふれるものだった。日本のクラシック界は、どうしても大きなホールで重厚長大な交響曲やオペラを指揮するスター指揮者。あるいはピアノに人気を振りまいた。もちろんその魅力はよく理解しているつもりだが、作品のおもしろさや別の一面、時代や社会とのかかわりを示唆し、思索と考察への扉を開いてくれる公演は、ほかにたくさんある。今回はそのことを意識して、ベスト・アーティスト以下の10本を選んだ。ベスト・アーティスト80歳前後の音楽家たち3人(リッカルド・ムーティ(指揮)、井上道義(指揮)、アレクセイ・リュビモフ(p))の、尽きることのない音楽への愛に敬意を表す。イタリヤ・オペラ、我が国の指揮者、ロシアのピアノ・ソム、それぞれ輝かしい伝統を体現する人々。期待の若手・布施砂丘彦 (cb) は「美しい新宿花園の娘」のような自主公演や古楽アンサンブルでの活動で、太田弦とタルモ・ベルトコススキは指揮で、とにかく新鮮で楽しみな人々だ。

第1位◎ジョヴァンニ・アントニーニ (指揮) /イル・ジャルディーノ・アルモニコ、イザベル・ファウスト (vn)

- 第54回サントリー音楽賞受賞記念コンサート 井上道義 (指揮) [2024年12月30日/サントリーホール]
- 新国立劇場オペラスタジオ (オペラ研究所)、モーツァルト《フィガロの結婚》 [2月24日/新国立劇場 中劇場]
- ベルチャ弦楽四重奏団&エペス弦楽四重奏団 [3月28日/ TOPPAN ホール]
- アレクセイ・リュビモフ (p) [4月17日/五反田文化センター音楽ホール]
- 布施砂丘彦《美しい新宿花園の娘》 [6月14日/王城ビル]
- セイジ・オザワ 松本フェスティバル、プリテン《夏の夜の夢》 [8月20日/まつもと市民芸術館]
- リッカルド・ムーティ指揮/東京春祭オーケストラ、ヴェルディ《シモン・ボッカネグラ》 [9月15日/東京音楽大学100周年記念ホール]
- ウィーン国立歌劇場、R.シュトラウス《はらの騎士》 [10月24日/東京文化会館]
- 新国立劇場、ベルク《ヴォツェック》 [11月18日/新国立劇場 オペラパレス]
- ◎ベスト・アーティスト リッカルド・ムーティ (指揮)、井上道義 (指揮)、アレクセイ・リュビモフ (p)
- ◎期待の新人 布施砂丘彦 (cb、音楽評論家、他)、太田弦 (指揮)、タルモ・ベルトコススキ (指揮)



ピアニスト、指揮者、作曲家、と世界中の観客を魅了する芸術家ミハイル・プレトニョフ ©Rainer Maillard

イタリア・オペラ上演を中心に活動を続ける藤原歌劇団は2024年6月7日に創立90周年を迎えた。その締めくくりとなる公演「ヴェルディ 歌劇『ファルスタフ』」が1日と2日、東京文化会館にて上演。5日には第35回日本製鉄音楽賞が発表され、上野通明（vc）と宮澤敏夫（富士山静岡交

2月 February

7日には汐澤安彦（指揮）、26日には秋山和慶（指揮）と日本を代表する指揮者が逝去した。

1月 January
1日には早速古楽協奏のスペシャリスト、渡邊順生（p）の第66回毎日芸術賞受賞が発表。8日は横浜みどりみらいホール「プロデューサー in レジデンス」が反田恭平から石田泰尚へと引き継がれ、31日には第26回ホテルオークラ音楽賞受賞者が発表。金川真弓（vn）、北村陽（vc）の二人に決定した。華やかな話題が続くが、とくに注目されたのは23日の角野肇斗（p）のベルリン・デビューである。ジャンルを超えた活動によって圧倒的な存在感を放つ角野がより大きな躍進を遂げる公演となった。

プレイバック2025
注目トピックス



文：長井進之介
Text: Shinosuke Nagai

国際コンクールでの若手演奏家の快挙から、クラシック音楽の発展に貢献し続けた巨匠たちの逝去まで2025年も様々な出来事があった。当コーナーでは、2025年1月の注目の音楽界のトピックスを振り返る。

響楽団専務理事）が受賞。日本とフランスを拠点に活躍する作曲家、権代敦彦のNHK交響楽団第72回「尾高賞」受賞も17日に発表された。20日には第33回出光音楽賞受賞者ガラコンサートが行われ、戸澤宏紀、前田妃奈（以上vn）、務川慧悟（p）が出演した。

9日にはエディット・マティス（S）が逝去。オペラにオラトリオ、歌曲とあらゆる分野で活躍した名ソプラノであり、多くのファンが悲しみに暮れた。

3月 March

世界から尊敬を集めるアンドラ・シフ（p）が率いるアンサンブル「カペラ・アンドレア・バルカ」が惜しまれつつも活動終了することに伴い、最後の来日公演が21〜23日、そして25、26日に行われた。彼らが高齢化を理由に活動を終了するいうのは、いま最も注目されている若きヴァイオリニスト、HIMARIがベルリン・フィルハーモニー管弦楽団にデビュー（20〜22日）を果たし、世界から熱い視線を集めた。輝かしい才能がこれから新たな時代を切り開いてくれることに期待したい。

5日には第23回齋藤秀雄メモリアル基金

	2025年	2024年
ベートーヴェン	1048	1049
モーツァルト	934	1013
J.S.バッハ	638	713
ショパン	604	632
ブラームス	557	557
ラヴェル★	489	392
チャイコフスキー	452	432
シューマン	403	415
シューベルト	397	410
ドビュッシー	298	365
ドヴォルジャーク	298	309
J.シュトラウス2世★	287	194
リスト	281	328
メンデルスゾーン	265	277
ラフマニノフ	260	246
サン＝サーンス	232	230
ブッチェーニ	214	212
ヴェルディ	181	185
フォーレ	176	180

●作曲家別演奏会数
若干演奏回数が増えたものの、不動の人気を誇るベートーヴェンとモーツァルト。メモリアル・イヤーを迎えたラヴェル（生誕150年）とJ.シュトラウス2世（生誕200年）は前年よりも大きく公演数を増やした（★=2025年にアニヴァーサリーを迎えた作曲家）



日本を代表する指揮者の一人として活躍した秋山和慶（1941～2025）。1月23日に引退を表明した直後の訃報は多くの人に哀しみをもたらした ©Tokyo Symphony Orchestra

Looking back on 2025

渡辺和彦 Kazuhiko Watanabe

■音楽評論家
演奏会数：95回



ベルチャ弦楽四重奏団&エペーヌ弦楽四重奏団。世界の第一線を担う二つのクアルテットが響き合う八重奏は圧巻 ©大塚道治

渡辺和 Yawara Watanabe

■音楽ジャーナリスト
演奏会数：146回

芸術組織のトップにしばしば著名芸術家が招かれるが、聴衆がそれと実感できる成功例はなかなかない。2024年に石川県立音楽堂アーティストック・クリエティブ・ディレクターに任命された狂言師の野村萬斎は、その3年前から務める邦楽監督の枠を越え、オーケストラ・アンサンブル金沢を巻き込んだ異種間コラボレーションを展開してきた。萬斎企画の第4弾は、現代能『鷹姫』上演に武満徹や尾高忠実などの作品を記した広上淳一（指揮）との共同作業。今回は実演演出に徹した萬斎は、ノークラウド、フル上演の現代能にその同時代の音楽を必要最小限で絡め、イェーツの目を通して抽象化された能と日本戦後の現代音楽に共通する沈黙の雄弁さを際立たせる。世界のどこに出しても恥ずかしくない、極めて芸術性の高い作品となった。日本在住で90歳を迎えたテリー・ライリー（作曲）の各地での活躍、強烈な音楽性で日本・フィルハーモニー交響楽団九州公演の半世紀も盛り上げたカーチン・ウォン（指揮）らの仕事も忘れられない。またたくのノーマークからパンフ国際弦楽四重奏コンクールで第2位を獲得したクアルテット連、学習拠点を海外に移そうとしているQuartet風雅は、方向性は違っても日本弦楽四重奏界の未来を担える存在となるや、注目すべし。

能と現代音楽のコラボが実現
共通する沈黙の雄弁さが際立つ

- 第1位◎ MANSAI CREATION BOX Vol.4 ~萬斎のおもちゃ箱~
[10月18日/石川県立音楽堂コンサートホール]
- 共同制作オペラ、沼尻電典《竹取物語》
[2024年12月1日/ichiko グランシアタ]
 - カーチン・ウォン指揮/日本フィル、第50回九州公演（大牟田）
[2月9日/大牟田文化会館]
 - ベルチャ弦楽四重奏団&エペーヌ弦楽四重奏団
[3月28日/TOPPAN ホール]
 - テリー・ライリー生誕90歳を祝うコンサート by Kronos Quartet
[6月25日/神奈川県立音楽堂]
 - 曲がった家を作る人——故郷に響く西村朗の音楽《弦楽四重奏》
[7月6日/あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール]
 - 沼尻電典指揮/神奈川フィル、フェスタサマーマニエザ KAWASAKI 2025
[8月8日/ミューザ川崎シンフォニーホール]
 - 會田瑞樹 (perc)
[10月3日/東京文化会館 (小)]
 - 小林道夫 (p) & 波多野隆美 (Ms)
[10月24日/ichiko 音の泉ホール]
 - 新国立劇場、ベルク《ヴォツェック》
[11月15日/新国立劇場 オペラハウス]
- ◎ベスト・アーティスト
野村萬斎（演出）、カーチン・ウォン（指揮）、テリー・ライリー（作曲）
- ◎期待の新人
クアルテット連、Quartet 風雅

「第1ヴァイオリン牽引」を継承
シューマン・クアルテット

第1ヴァイオリンのエリック・シューマンが強烈な個性で全体をリードするという超個人的スタイルのペーター・ヴェンの弦楽四重奏曲全曲演奏会。これは2010年代ごろにはもう絶滅危惧種になりかけていたクアルテットの「もう一つの」ありかたでもある。近年はコンクール審査の傾向が災いし、日本では「管理型」（スメタナ弦楽四重奏団、アルバン・ベルク四重奏団、ハーゲン弦楽四重奏団はその典型）のデッドコピー・クアルテットが高く評価され、「第1ヴァイオリン牽引型」（往年のアマテウス弦楽四重奏団など）は排除されていた。しかし世界は広い。「第1ヴァイオリン牽引」のスタイルを現在まで見事に受け継いでいる4人が、いるところにはいるのだった。今回の「シューマン・クアルテット」によって本場に久しぶりに、ペーター・ヴェンの弦楽四重奏曲16曲ブラッスアルファが、深遠さのなかにも強い歌心やセンチメンタリズム、ときにユーモアを欠かさない音楽であること「生」で再確認できた。拒否反応を示す人もいたようだがクアルテットにも色々違うスタイルがあつてよい。

- 第1位◎シューマン・クアルテット ペーター・ヴェン・サイクル
[6月11～12日、14～15日、17～18日/サントリーホール (小)]
- ジョヴァンニ・アントニーニ指揮/イル・ジャルディーノ・アルモニコ、イザベル・ファウスト (vn)
[2024年12月10、11日/東京オペラシティコンサートホール]
 - 山下愛陽 (g)
[4月28日/ヤマハホール]
 - マリオ・ブルネロ指揮、vc/東響、東京オペラシティシリーズ 第145回
[6月21日/東京オペラシティコンサートホール]
 - ジョナサン・ノット指揮/東響、ブリテン《戦争レクイエム》
[7月19日/ミューザ川崎シンフォニーホール]
 - ヨーヨー・マ (vc)
[9月20日/サントリーホール]
 - ヴェロニカ・エーベルレ (vn)、三浦謙司 (p)
[10月17日/東京文化会館 (小)]
 - ジャニーヌ・ヤンセン (vn)、デニス・コジュヒン (p)
[11月13日/東京オペラシティコンサートホール]
 - ドミトリ・ウトヴィチェンコ (vn)、ミカエル・ロボネン (p)
[11月20日/東京文化会館 (小)]
 - キリル・ペトレンコ指揮/ベルリン・フィル、プログラムB
[11月23日/サントリーホール]
- ◎ベスト・アーティスト
シューマン・クアルテット
- ◎期待の新人
ドミトリ・ウトヴィチェンコ (vn)、山下愛陽 (g)、中谷哲太郎 (vn)



サントリーホール チェンバーミュージック・ガーデンでペーター・ヴェンの弦楽四重奏曲全曲を披露したシューマン・クアルテット ©池上直哉